

新 堂 遺 跡

—一般国道 42 号有田海南道路建設事業に伴う発掘調査報告書—

2023 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



1. 遺跡遠景（南東から）



2. 調査区近景（南から）

序

有田市に所在する新堂遺跡は、有田川河口近くの山裾に位置します。周辺には多くの遺跡があり、弥生時代以降は各期を通じて有田川町の旧吉備町域とともに有田地方の中樞を占めてきたところです。

このたび、国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所の委託を受けて一般国道有田海南道路建設事業に伴い、新堂遺跡の発掘調査を実施しました。有田市域では数少ない発掘調査事例で、新堂遺跡につきましても今回が最初の調査となります。

調査では、古代の土坑や中世の土坑・柱穴、近世の埋桶などの遺構が見つかり、弥生時代から近世にかけての土器類などの遺物が出土しました。これらのことから、弥生時代以降、周辺で集落が営まれていたことが分かり、これまで性格が不明であった遺跡の内容の一端が明らかになりました。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に当たりご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

令和5年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井 敏雄

例 言

1. 本書は、有田市新堂に所在する新堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、一般国道 42 号有田海南道路建設事業に伴うもので、令和 3・4 年度に発掘調査業務を実施し、令和 4 年度に報告書作成に伴う出土遺物等整理業務を実施した。
3. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務は、国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所（以下、「和歌山河川国道事務所」という。）の委託を受け、和歌山県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）の指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「当文化財センター」という。）が実施した。
4. 発掘調査業務・出土遺物等整理業務の調査組織は下記の通りである。

	【令和 3 年度】	【令和 4 年度】
事務局長	平林 照浩	平林 照浩
埋蔵文化財課長	高橋 智也	高橋 智也
発掘調査業務担当	川崎 雅史・森田真由香	川崎 雅史
出土遺物等整理業務担当		川崎 雅史

5. 本書の執筆・編集は川崎がおこなった。
6. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、当文化財センターが、出土遺物は県教育委員会が保管している。
7. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務に際し、下記の方々や団体からからご協力を得た。記して感謝を表します。

河内一浩 中西瑠花 富加見泰彦 森村健一 有田市教育委員会

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006. 4）に準拠しておこなった。
2. 調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（平成十四年国土交通省告示第九号）第VI系であり、値m単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P. +）の数値である。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2018 年版）に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。
4. 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲し、遺構番号は種別に関わらず 1 からの通し番号で、また、遺物番号も種類等に関わらず 1 から通し番号を付している。
5. 調査で使用した調査コード 21 - 18・007（2021 年度－有田市・新堂遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例

第1章 環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査の経過と経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査業務の経過	5
第3節 出土遺物等整理業務	6
第3章 調査方法	7
第1節 地区割り	7
第2節 調査手順	7
第3節 記録	8
第4章 調査内容	8
第1節 基本層序	8
第2節 調査成果	9
1. 奈良時代の遺構と遺物	9
2. 鎌倉時代の遺構と遺物	9
3. 江戸時代の遺構と遺物	14
4. 包含層などからの出土遺物	17
第5章 まとめ	21
遺物観察表	22
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

図 1	和歌山県の岩石分布のようす……………	1	図 8	遺構図（中世の溝状遺構）……………	13
図 2	遺跡の位置……………	2	図 9	古代・中世の遺構出土遺物……………	14
図 3	周辺の遺跡……………	2	図 10	近世の遺構（1）……………	16
図 4	地区割り……………	7	図 11	近世の遺構（2）……………	18
図 5	調査区全体図……………	10	図 12	近世の遺構出土遺物……………	19
図 6	調査区断面土層図……………	11	図 13	包含層などの出土遺物……………	20
図 7	遺構図（古代・中世の土坑）……………	12			

写 真 目 次

写真 1	椒の古墳……………	3	写真 5	出土遺物等整理業務 遺物接合…	6
写真 2	新堂観音寺の墓地……………	4	写真 6	ラジコンヘリコプターによる撮影	8
写真 3	発掘風景……………	6	写真 7	基本層序……………	8
写真 4	応急遺物整理 遺物洗浄……………	6			

図 版 目 次

巻頭図版	1. 遺跡遠景（南東から）		図版 5	1.1区 遺構 3 断面（東から）	
	2. 調査区近景（南から）			2.1区 遺構 4・5（東から）	
図版 1	調査区全景（上空から）			3.1区 遺構 4 断面（東から）	
図版 2	1.1区全景（南から）			4.1区 遺構 22・23（上空から）	
	2.2区全景（南から）			5.1区 遺構 24・25（上空から）	
図版 3	1.1区下層確認トレンチ断面（西から）			6.1区 遺構 27・28・31・33（上 空から）	
	2.1区東壁断面（北西から）			7.2区 遺構 91・92（上空から）	
	3.2区東壁断面（西から）			8.2区 遺構 132・133（上空から）	
図版 4	1.1区 古代・中世の遺構群（上空から）		図版 6	出土遺物（1）	
	2.1区 遺構 35・58（上空から）		図版 7	出土遺物（2）	
	3.1区 遺構 59・84 周辺（上空から）		図版 8	出土遺物（3）	
	4.1区 遺構 41 断面（東から）				
	5.1区 遺構 35 断面（西から）				
	6.1区 遺構 45 断面（東から）				
	7.1区 遺構 49 断面（西から）				

第1章 環境

第1節 地理的環境（図1・2）

有田市は和歌山県の北西部に位置し、高野山を源流とする有田川の河口域を占める。東は有田郡有田川町、南は同郡湯浅町、北は海南市下津町に接して、西は紀伊水道に面する。市域は東西に長く、東西約10 km、南北約5 kmで、面積は約37k m²を測る。

市の北側には三波川変成帯を基盤とする急峻な長峰山脈が東西に連なり、有田川（御荷鉢）構造線を挟んで市域の南側は秩父帯からなる丘陵が広がり、その西端は宮崎の鼻で紀伊水道に没している。市の北西部の初島地区には海岸砂丘が発達しており、その後背地には平野部が形成されている。沖合には地の島、沖の島、苅藻島の3島が浮かぶが、苅藻島は現在埋め立てによって地続きとなっている。有田川は紀の川や日高川のように河口域に大きな沖積平野を伴わず、有田川に向かって開く複数の谷底平野に水田が広がっており、集落の多くは山裾に形成された小規模な扇状地に展開している。

農業の基幹作物はみかんで、「有田ミカン」の名で全国に知られる温州みかんは、有田川に面した山の頂まで耕された段々畑で栽培が行われていたが、最近では省力化を求めて平野部で水田を転換して栽培されている。

また、大阪湾からの内海系水と南からの黒潮分支流の影響を受けて沿岸漁業も盛んで、タチウオの漁獲量は日本一を誇り、水揚げされた魚を原料とする水産加工業も盛んである。

商工業では、除虫菊を用いた蚊取り線香の発祥地の地としても有名で、現在も大手2社の工場が生産がおこなわれている。初島地区の海浜部では第2次世界大戦前より石油精製所が営業されており、雇用や市財政を担い、産業振興などの発展に寄与していたが、2023年度に閉鎖が決まっている。

交通としてはJR紀勢本線が走り、初島・箕島・紀伊宮原の各駅がある。また、国道42号がJRと同じように市内を走るが、自動車道が有田市を通過しないため、有田市と和歌山市間の国道42号は、朝晩に慢性的な渋滞を引き起こしている。

新堂遺跡は河口近くの右岸に展開する遺跡で、弥生土器の散布地として周知されていたが、発掘調査されたことがなく遺跡の性格等については明らかになっていなかった。遺跡の立地は有田川に向かって開口する小谷部で、調査区付近は小規模な扇状地形の扇端付近に位置する。このため、付近は北から南に下る地形で、階段状の宅地が造成されていた。調査区付近の標高は4.5～8.0 mである。



図1 和歌山県の岩石分布のようす
出典：和歌山県教育委員会『わかやま発見』

第2節 歴史的環境（図3、写真1・2）

有田市域で旧石器時代の遺跡は確認されていないが、東隣の有田川町藤並地区遺跡や土生池遺跡などで、今から約1万数千年前から約2万年前の石器類が出土している。

縄文時代の遺跡は、有田川の上・中流域の河岸段丘上で多く確認されており、有田市域では地ノ島遺跡（1）のみが知られている。これまで実施された発掘調査で前期末（大歳山式）・中期中頭（鷹島式）のほか、後期前半や晩期後半の縄文土器が出土している。広川町の沖合にある鷹島遺跡とは立地や遺物内容が似通っているが、ともに狩猟や木の実の採集を行うには狭小であり、実際、地ノ島遺跡では、石鏃は出土していない。縄文時代の季節に応じた生活サイクルを考えた場合、春・夏季限定のキャンプサイト的な遺跡であった可能性がある。

弥生時代の遺跡で前期に遡るものとしては、縄文時代の遺跡でもある地ノ島遺跡がある。この遺跡では稲作とともに伝わったとされる遠賀川式の甕・壺が出土しているが、稲作に適した平野は存在しない。また、中期以降の土器が出土しており、同じように県下の島嶼部や可耕地が直近にない半島部に位置する遺跡でも、よく似た消長を持つことから、これらの遺跡は交流に関わる遺跡である可能性が考えられる。環濠集落に代表されるような平野部における拠点的な集落は有田市域では確認されていないが、有田川町の田殿



図2 遺跡の位置

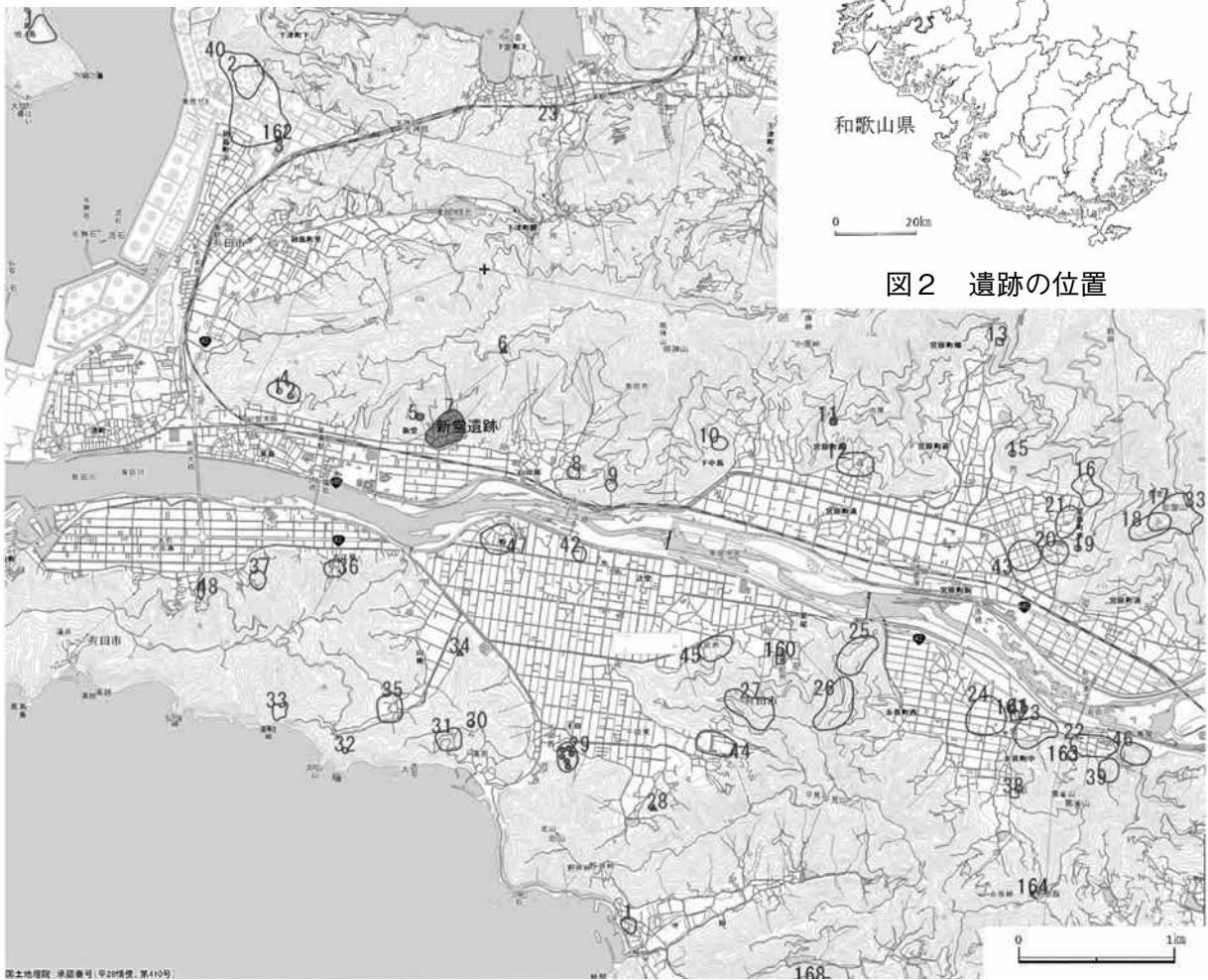


図3 周辺の遺跡 出典：和歌山県地理情報システム（和歌山県埋蔵文化財包蔵所在地図）

尾中遺跡や旧吉備中学校校庭遺跡が拠点的な集落であったと考えられる。なお、中期末頃から後期にかけて出現する高地性集落は有田市に多く、水田耕作には適さない丘陵の山頂近くや中腹に存在する。中国の歴史書にある「倭国大乱」の記述から、戦いのため高所に集落を築いたとする説もある。高地性集落のうち岩室遺跡（18）は、中世における岩室城跡（17）と重複し、同じように和歌山県中南部の中世の拠点的な広川町・湯浅町にある広城跡や御坊市亀山城跡・みなべ町平須賀城跡などの山城も、弥生時代の高地性集落と重複する。これらの城は平野部を見下ろす要衝の地に築かれていることから、高地性集落成立の背景に戦いがあった可能性は否定できない。ただ、高地性集落が多い理由としては、ミカン畑として山頂まで開墾されているため発見されやすいことに起因し、同じように梅畑が山頂まで開墾されている田辺・南部地域でも高地性集落が多く見つまっていることも無視できない事柄と言える。

弥生時代の農耕祭祀に使用したとされる銅鐸は、有田市内の3カ所で4個出土しており、すべてがミカン畑開墾中の不時発見である。大峯銅鐸（6）は新堂遺跡の北側の山頂近くで畑の開墾中に見つかったもので、扁平鈕式銅鐸2個が入れ子状態で出土しており、古い時期の銅鐸の埋納形態を裏付けるものである。野井銅鐸（28）・上ノ段銅鐸（34）は有田川左岸の山腹で見つかったもので、このうち野井銅鐸は扁平鈕式銅鐸である。上ノ段銅鐸は現物が残っていないことから明らかでないが、記録などから銅舌を伴った外縁付鈕式銅鐸と考えられており、県下では和歌山市太田黒田銅鐸や御坊市小松原銅鐸とともに、古い形式の銅鐸と言える。また銅鐸の直近からは大阪湾型銅戈が6本出土しており、県下では唯一無二の例である。

古墳は海浜部に位置するものと、山麓・山腹に位置するものがある。海浜部に位置するのは、帆立貝式前方後円墳の椒の古墳（3）で、主体部に初期の横穴式石室を持つ中期古墳である。副葬品には石枕・虺龍文鏡・玉類・刀・槍・鏃・甲冑・土器類などがあり、冑は形状が蒙古鉢状で大陸的色彩が強い。また、椒の古墳北側の山裾付近では箱式石棺墓が約20基確認された椒浜古墳群（2）、一帯にも土器が散布している状況から、古墳時代の一大墓域が展開していた可能性がある。また、地ノ島遺跡の4基の箱式石棺墓とともに、漁や交易など海に生業を求めた人々の墓であった可能性もある。

一方、有田川に沿う山麓・山腹では右岸に箕島古墳群（4）・新堂古墳（5）・山田原古墳（8）・宮原古墳（11）・円満寺古墳（19）が、左岸に山地古墳（32）や岡崎古墳群（29）・星尾山古墳などがある。このうち、箕島2号墳・山田原古墳・円満寺古墳は古墳自体が消滅していることから詳細は明らかでないものの銅鏡が出土し、前期あるいは中期に遡る古墳であった可能性が高い。また、箕島1号墳・宮原古墳は結晶片岩を用いた岩橋型の横穴式石室を持っており、このうち箕島1号墳からは豊富な遺物とともに埴輪が出土している。このほか左岸の星尾山でも埴輪が出土している。

古墳時代の集落遺跡は明らかでないが、古墳の立地を見るとほぼ一定間隔に点在していることから、古墳を造営した集落が



写真1 椒の古墳

有田川沿いに点在していたと考えることができる。

また、弥生時代から古墳時代にかけて海浜部で製塩を行っていたことが、製塩土器の出土から窺え、地ノ島遺跡や津井浜遺跡（33）などがある。

古代の有田市は海部郡と在田郡に属し、「和名抄」にある有田郡五郷のうち須佐郷は須佐神社が位置する有田川左岸付近と推定され、英多郷は右岸の宮原付近とする説がある。また海部郡は和歌山県北部の海岸部を範囲としているが、「日本霊異記」の内容からも初島付近は海部郡に含まれ浜中郷の一部に比定できる。また、平城宮跡出土の天平年間の木簡から、幡陀郷から調として塩を収めたことが分かっており、この幡陀郷がやはり宮原付近とされている。

古代の寺院としては安置された仏像や瓦の出土から宮原町円満寺（20）・多喜寺（12）や宮崎町浄妙寺などがあり、一様に平野に面した谷あい位置している。また、式内社は在田郡で1社のみで千田に所在する須佐神社が知られている。

平安時代後期以降、上皇・貴族を中心に熊野参詣が盛んになり、その参詣道が市の東部を南北に縦断しており、道沿いには蕪坂王子社跡・山口王子社跡（13）・糸我王子社跡（38）がある。在地豪族である湯浅氏は参詣道を押さえ有田川渡河を控えた地に岩室城を築き、その後、城は紀伊国守護である畠山氏によって戦国時代を通じて維持される。岩室城跡の麓には宮原土居跡があったとされるが明確な遺構は確認できない。また宮崎氏や貴志氏も平地に館跡を築いたとされるが堀などの遺構は明らかになっていない。

今回、調査を実施した新堂遺跡（7）の周辺では新堂古墳が直近の山腹に位置し、谷奥の山頂部には大峯銅鐸出土地がある。また、遺跡の範囲内にある観音寺の墓地には、中世の五輪塔や宝篋印塔が多数集められており、同時期の蔵骨器も散布あるいは原位置を保った状態で確認でき、中世に遡って墓地が存在していたことが窺える。



写真2 新堂観音寺の墓地

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

和歌山河川国道事務所が計画して工事を進めている一般国道42号有田海南道路は、有田市から和歌山市間における朝夕の交通混雑を緩和するため、有田市野から海南市冷水間を結ぶ延長9.4kmの片側1車線のバイパス及び現道の事故危険箇所対策を目的とした道路である。

事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田市の新堂遺跡に該当することから、その範囲での工事については、平成29年3月23日付け国近整和二調第23号で和歌山河川国道事務所長より県教育委員会へ文化財保護法第94条第1項の規定に基づく発掘の通知がおこなわれた。これを受けて、平成29年4月10日付け文第04050002号の(3)で確認調査が必要である旨、県教育委員会から通知された。

その後、令和2年11月17日付け国近整和計第8号で和歌山河川国道事務所長より県教育委員会に確認調査実施の依頼があり、令和2年12月12日付け文第04140003号の18で県教育委員会がこれを受諾し、一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う新堂遺跡試掘確認調査として実施された。確認調査は、令和3年2月2日から2月5日の4日間で、トレンチ6か所を設けておこなわれた。調査面積は49.32㎡である。

調査の結果、南端と北端の2か所を除くトレンチでピットなど埋蔵文化財の展開が確認され、これらは出土遺物から古墳時代から中世の遺跡と判断された。また、この調査において従来の遺跡範囲より東側に遺跡が展開していることが明らかになったことから、文化財保護法第95条、和歌山県文化財保護条例第28条及び同施行規則第16条第5項の規定に基づき、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が変更された。

これらの結果を受けて、埋蔵文化財の展開が確認された範囲における一般国道42号有田海南道路建設事業に際しては、平成31年3月25日付け文第03250007号和歌山県教育委員会教育長通知「和歌山県における発掘調査等を要する場合の取り扱い基準の一部改正について」に基づき、高架・橋梁・歩道以外の道路並びに工事により埋蔵文化財が掘削されて損壊される場合に該当することから、記録保存目的の本発掘調査が必要であると判断された。

第2節 発掘調査業務の経過

本発掘調査は、和歌山河川国道事務所から令和3年9月13日付け国近整和計第7号で県教育委員会に調査の依頼があり、県教育委員会から令和3年9月13日付け文第09130001号で当文化財センターに実施計画書の提出依頼があった。当文化財センターは令和3年11月1日付け和文セ第233号で実施計画書を提出し、令和3年11月22日付けで和歌山河川国道事務所と当文化財センターにおいて、「一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う新堂遺跡発掘調査業務」の委託契約を締結した。

現地調査に際し、発掘調査は「一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う新堂遺跡発掘調査工事」として、令和4年1月11日から7月29日までの工期で和光産業株式会社に、航空撮影及び基準点測量は、「一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う新堂遺跡発掘調査に係る航空写真測量委託業務」として、令和4年1月12日から令和4年4月15日の工期で株式会社共和に再委

託している。

現地調査は、令和4年1月中旬よりコンクリート構造物の撤去・処分等の準備作業をおこない、2月3日より掘削作業を開始した。調査区は排土置き場を確保するため2分割し、南側を土工1（1区）、北側を土工2（2区）として順次調査をおこなった。1区の調査がほぼ終了した2月26日に第1回目の航空写真撮影・測量を実施するとともに、高所作業車による写真撮影をおこなった。2区の掘削作業は3月から開始し、調査がほぼ終了した3月17日に第2回目の航空写真撮影・測量と高所作業車による写真撮影をおこない、引き続き補足調査をした。3月24・25日に現地公開を実施し、3月末までに埋戻し作業をおこなった。その後、片付け・撤収作業とともに、廃棄プラスチック・瓦礫類・木屑などの処分をおこない、業務は9月末までに終了した。



写真3 発掘風景

第3節 出土遺物等整理業務

報告書作成に伴う整理業務は、和歌山河川国道事務所の委託を受けて「一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う新堂遺跡発掘調査出土遺物等整理業務」として令和4年8月19日から令和5年3月10日までの契約期間で実施した。発掘調査で出土した遺物収納コンテナ（28ℓ）16箱を対象とし、このうち、遺物の洗浄作業は発掘調査業務と併行して応急遺物整理で実施していた。業務では遺物の注記、登録、接合・補強、復原をおこなうとともに、遺物実測図作成・トレース作業、遺構図のトレース作業を実施した。その後、遺物写真の撮影をおこない、発掘調査で撮影した遺構写真及び遺物・遺構図のトレース図とともに組版をおこなった。また、遺物観察表を作成し、一連の作業を踏まえ原稿執筆と編集作業をおこない報告書を刊行した。



写真4 応急遺物整理 遺物洗浄



写真5 出土遺物等整理業務 遺物接合

第3章 調査方法

第1節 地区割り

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割りの基準線は、平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）世界測地系第VI系の座標軸を使用し、新堂遺跡を網羅する区切りが良い北東隅の数値を中区画の基点（ $X = -211,000 \text{ m}$ 、 $Y = -79,000 \text{ m}$ ）とした。なお、調査においては大区画を使用していない。中区画の基点から、西方向および南方向に各々100m毎に区切った区画を1単位とした区画を設定し、基点から西方向へ大文字アルファベットでA～Yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。さらに中区画の中で4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字でa～y、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、中区画と小区画を組み合わせて表記した（例：I10e15）。今回の調査区は、中区画でH10、I10の範囲内に相当する。

方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（T.P.+）を基準とした値を使用した。

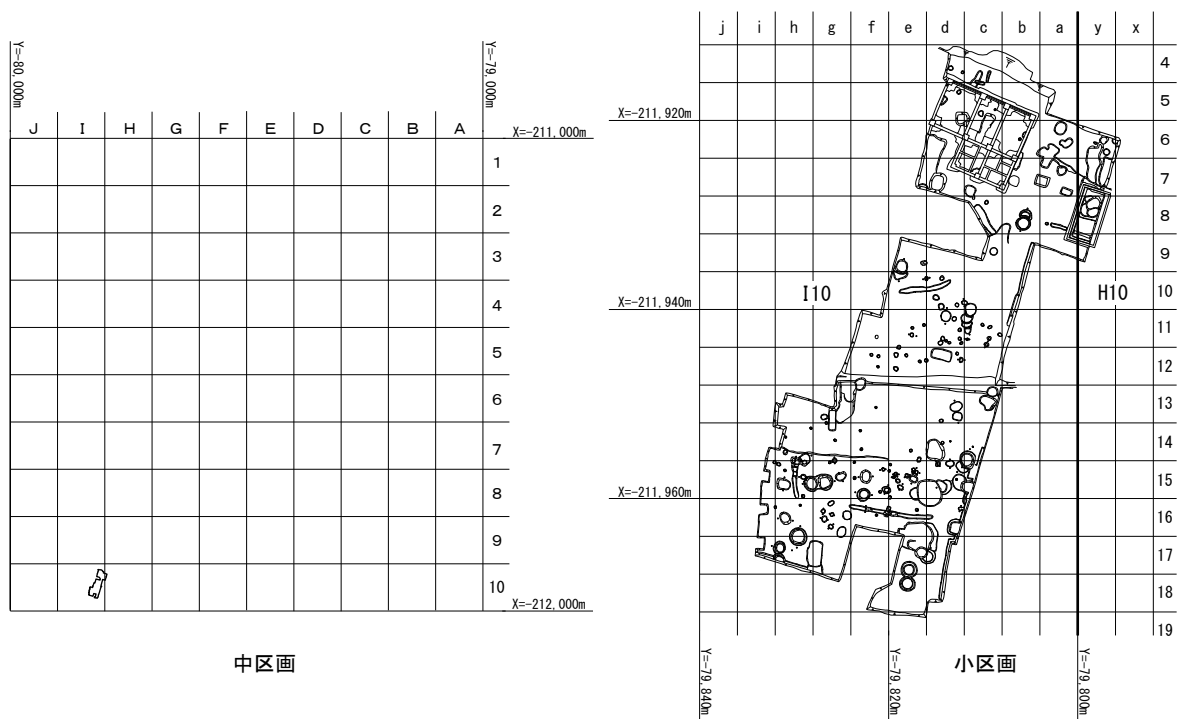


図4 地区割り

第2節 調査手順

発掘調査では、表土等を重機を使用して掘削を行い、その後、包含層以下を人力で掘削し、遺構の検出・掘削を行っている。人力掘削土はベルトコンベアーを使用し排土している。調査については、財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して実施している。

発掘調査で使用した調査コードは、21—18・007（2021年度—有田市・新堂遺跡）である。出土遺物、記録資料（図面、写真等）はこの調査コードを用い管理している。

第3節 記録

遺構番号は調査区ごとに種類にかかわらず通し番号とし、時代にかかわらず検出した順に番号を付している。

出土遺物は、中区画一小区画を取り上げ区画とし、遺構・層位別に取り上げている。

記録は写真撮影と図面作成を行った。

写真撮影については、全景写真のほかに検出した遺構のうち主要な遺構の個別写真・遺構断面、調査区壁面などについて撮影している。撮影にはフルサイズデジタルカメラ・中判デジタル

カメラを使用し、高所作業車などからも撮影している。また、これらと別に測量業務委託でラジコンヘリコプターを利用して、航空写真撮影をおこなっており、垂直全体写真、垂直部分写真、周辺部を含めた斜め写真を撮っている。航空写真撮影は1区と2区でそれぞれ実施している。

図面作成については、各遺構面の全体図を測量業務委託で航空写真測量を利用して図化（ $S=1/50$ ）しているのをはじめ、遺構配置図（ $S=1/100$ ）、調査区壁面土層図（ $S=1/20$ ）、主要な遺構平面図・断面図（ $S=1/10 \cdot 1/20$ ）などは、技術職員・調査補助員が実測図を作成している。



写真6 ラジコンヘリコプターによる撮影

第4章 調査内容

第1節 基本層序

調査地における基本層序は以下のように6層に分けた。遺構検出は基本的に第4層上面で行っているが、土色・土質は場所によって若干異なっている。また、2区では土石流によって第2・3層が1区ほど一様な堆積を成していない。

第1層 表土・盛土

第2層 2.5Y3/2 暗灰黄シルト 近世の包含層

第3層 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 中世の包含層

第4層 5Y3/2 黒褐砂質土 1～10 cm大の礫を多く含む 弥生土器を包含する
中世遺構のベース層

第5層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質土

1～10 cm大の礫を多く含む 弥生土器を包含する

第6層 10YR4/3 にぶい黄褐シルト 5 cmまでの礫を含む 無遺物層

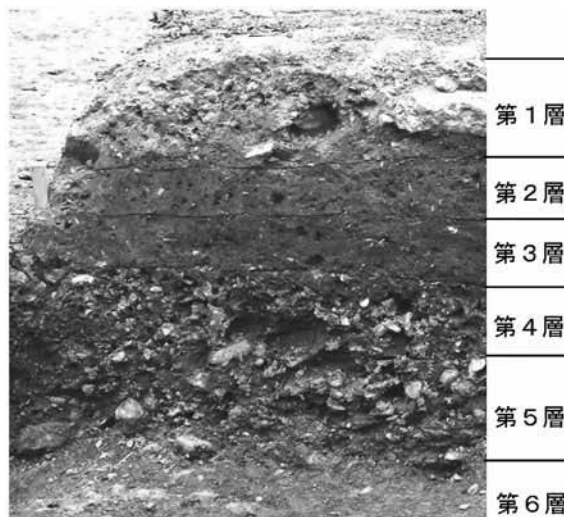


写真7 基本層序
(1区中央南側の断面)

第2節 調査成果

1・2区の旧状は宅地であった。1区と2区の間には石垣があり、約1.5m程度の高低差が存在した。また、2区北側についても畑との間に2.0mの石垣があった。石垣を構築して敷地が造成されたのは近世以降で、中世以前は緩やかに下る地形であったと考えられる。このため、1区・2区とも造成により北側の地山面が削平され、しかも建物基礎などの影響を受けていることから、それぞれの区で南側を中心に主な遺構を検出している。

検出した遺構には、古代から中世にかけての土坑・溝状遺構・柱穴・小穴や近世の埋桶・土坑などがある。中世の柱穴は多く検出しているものの、建物プランは明らかでない。

1. 奈良時代の遺構と遺物

明らかに当該期と判断できる遺構には土坑（遺構41）がある。

遺構41（図7・9、図版4・6） 1区の中央付近で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ0.95m、幅0.77m、深さ0.39mである。土質の違いから中央に直径0.50mの円形を呈する何らかの痕跡が確認できた。柱穴の可能性も考えたが、周辺に同時期の遺構が存在しないことから、曲物などの容器を埋納した土坑であった可能性がある。遺物は比較的多く、須恵器坏蓋（1）・坏身（2・3）・皿（4）・甕、土師器坏・皿のほか瓦器椀などが出土しているが、瓦器椀については混入品と判断される。土坑の時期は8世紀後半から末頃に帰属すると考えられる。出土した須恵器には焼成が不良で軟質なものが多い。

2. 鎌倉時代の遺構と遺物

鎌倉時代の遺構には土坑（遺構35・45・49・58・63）、溝状遺構（遺構59・84）、小穴・柱穴（遺構26・39・42・76・78・150）などがある。

① 土坑

遺構35（図7・9、図版4・6） 1区の中央西寄りで検出した土坑で、遺構58・59と重複し、それらより新しい。平面形状は不整楕円形で、規模は長さ1.00m、幅0.72m、深さ0.24mである。西側の底がやや深くなっており、断面形状は船底状を呈する。遺物は瓦器椀（5）・皿、土師器椀・皿などが出土しており、鎌倉時代前期頃の土坑であると考えられる。

遺構45（図7・9、図版4・6） 1区の中央東寄りで検出した土坑で、平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長さ0.92m、幅0.75m、深さ0.39mで、断面形状は船底状を呈する。遺物は瓦器椀、土師器皿・小皿（6）・土釜などが出土しており、遺物内容から鎌倉時代前期頃の土坑であると考えられる。

遺構49（図版4） 1区の中央東寄りで検出した土坑で、東半を攪乱によって削平される。平面形状は円形を呈していたと考えられ、規模は直径約1.35mに復元できる。深さは0.22mで、断面形状は船底状を呈する。遺物は瓦器椀・皿、土師器皿・土釜、東播系須恵器のほか古代の須恵器などが混入遺物として出土している。遺物の多くは細片で、鎌倉時代前期頃の土坑であると考えられる。

遺構58（図7・9、図版4・6） 1区の中央西寄りで検出した土坑で、遺構35と重複し、それより古い。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長さ1.20m、幅1.10m、深さ0.31mである。

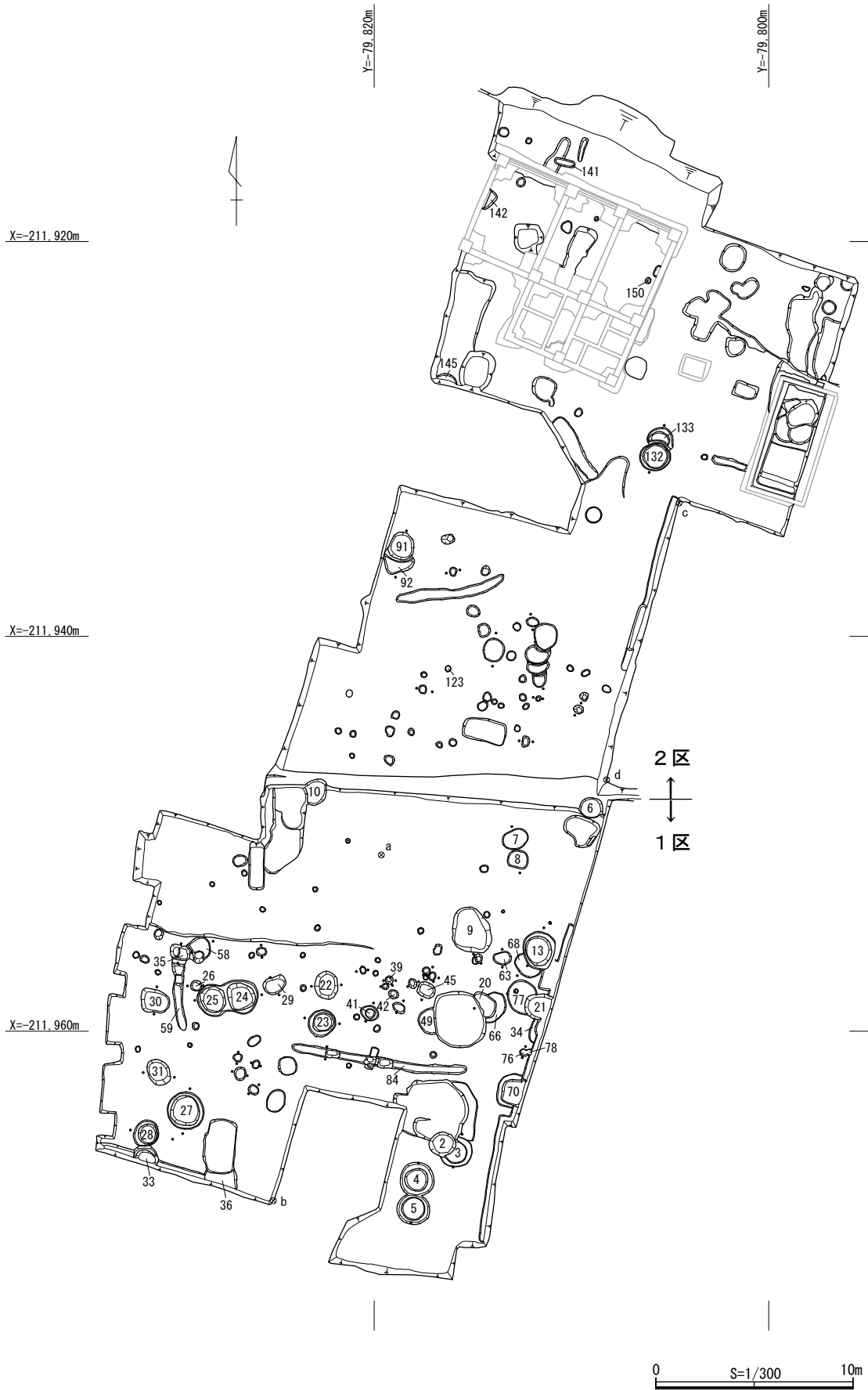
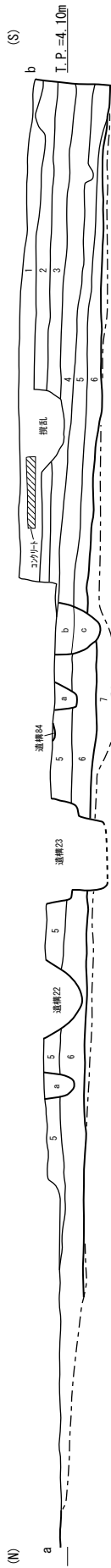


図5 調査区全体図

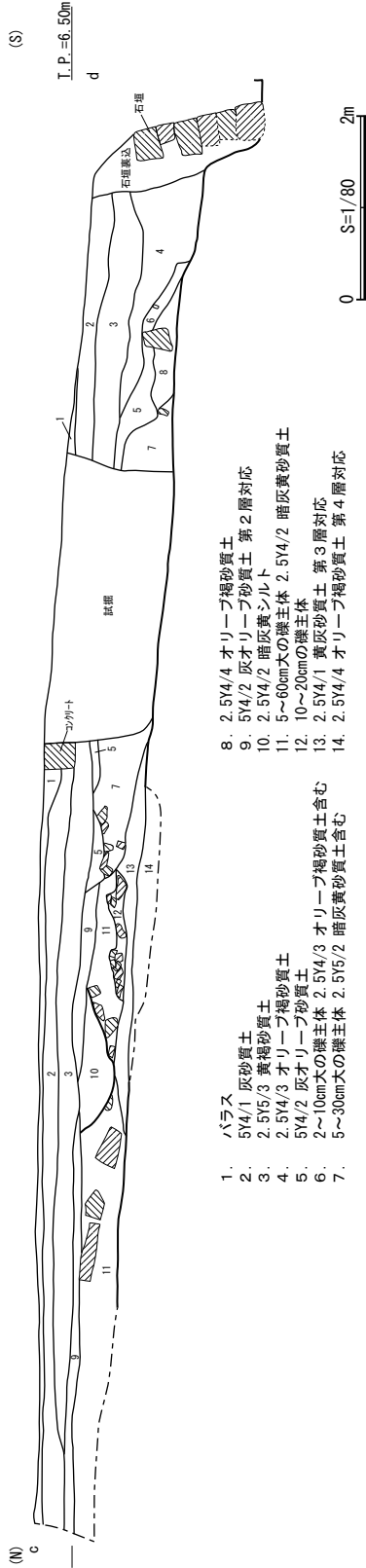
1区 下層確認トレンチ



1. 表土
 2. 礫層 盛土
 3. 2.5Y3/2 暗灰黄シルト 第2層：近世の包含層
 4. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 燻土粒・炭化粒微量含む 第3層：中世の包含層
 5. 2.5Y4/4 オリーブ褐砂質土 礫多量含む 第4層 弥生土器含む
 6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質土 礫多量含む 第5層 弥生土器含む
 7. 10YR4/3 にぶい黄褐シルト 礫含む 第6層 無遺物層
 a. 10YR3/2 黒褐シルト 礫中量含む
 b. 10YR3/3 暗褐シルト 礫中量含む
 c. 2.5Y4/3 オリーブ褐砂質土

* 断面位置は全体図に記入

2区 東壁



- ハラス
 1. 5Y4/1 灰砂質土
 2. 2.5Y5/3 黄褐砂質土
 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐砂質土
 4. 5Y4/2 灰オリーブ褐質土
 5. 2~10cm次の礫主体 2.5Y4/3 オリーブ褐砂質土含む
 6. 5~30cm次の礫主体 2.5Y5/2 暗灰黄砂質土含む
 7. 2.5Y4/4 オリーブ褐砂質土
 8. 2.5Y4/4 オリーブ褐砂質土
 9. 5Y4/2 灰オリーブ砂質土 第2層対応
 10. 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
 11. 5~60cm次の礫主体 2.5Y4/2 暗灰黄砂質土
 12. 10~20cmの礫主体
 13. 2.5Y4/1 黄灰砂質土 第3層対応
 14. 2.5Y4/4 オリーブ褐砂質土 第4層対応

図6 調査区断面土層図

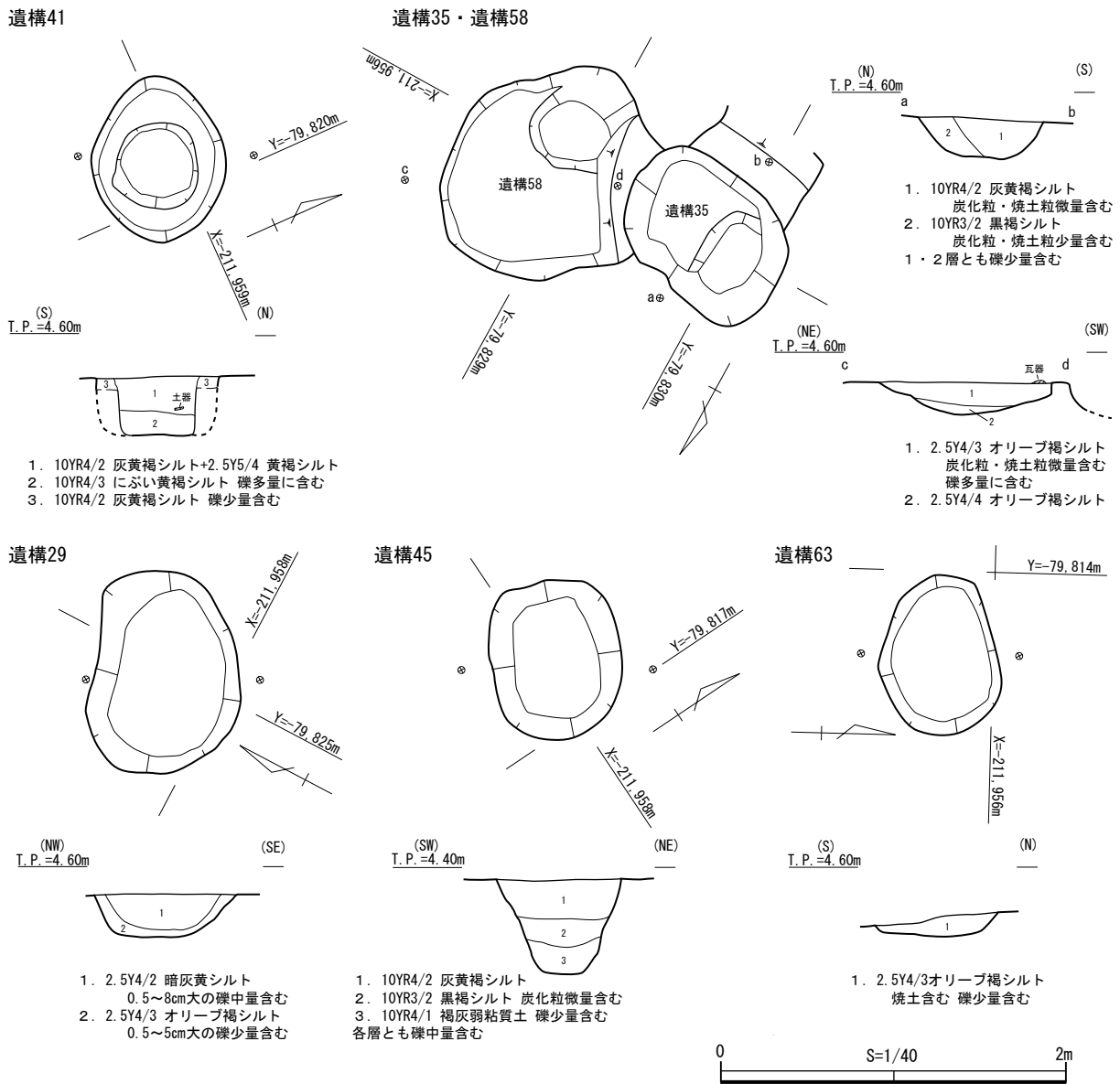


図7 遺構図（古代・中世の土坑）

断面形状は船底状を呈し、南側がやや深くなっている。遺物は比較的多く、瓦器碗（7）、土師器皿・小皿（8・9）・土釜、東播系須恵器甕、常滑甕、土錘（10）などが出土しており、鎌倉時代前期の土坑であると考えられる。

遺構 63（図7・9） 1区の中央東寄りで検出した土坑で、平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長さ1.20m、幅1.10m、深さ0.31mである。断面形状は船底状を呈する。遺物は瓦器碗（11）などが出土しており、埋土には焼土や炭が混入する。鎌倉時代前期の土坑であると考えられる。

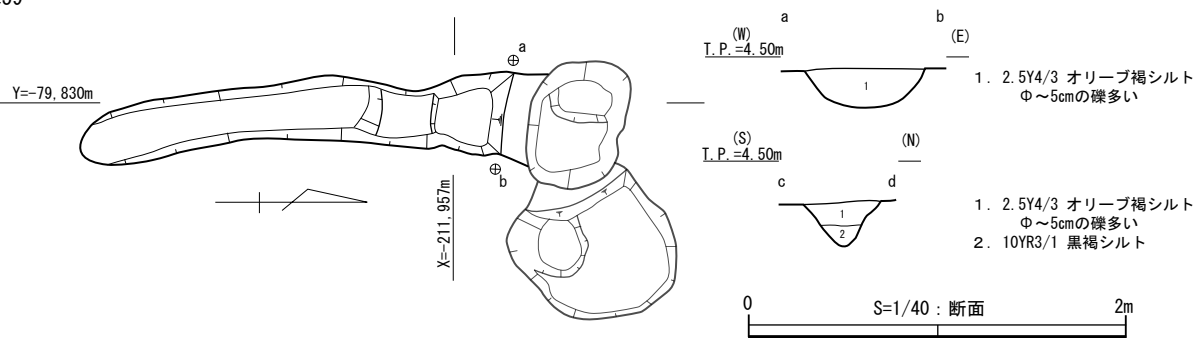
② 溝状遺構

遺構 59・84（図8・9、図版4） 1区の中央付近で検出した溝状遺構で、遺構59は南北に、遺構84は東西に一直線に伸びる。

遺構59は北側で遺構35に削平され、長さ3.50m以上、幅0.50m、深さ0.22mである。断面形状は船底状を呈する。遺物は土師器皿などが出土している。

遺構84は長さ8.90m、幅0.40~0.50m、深さ0.05mである。断面形状はV字状を呈する。

遺構59



遺構84

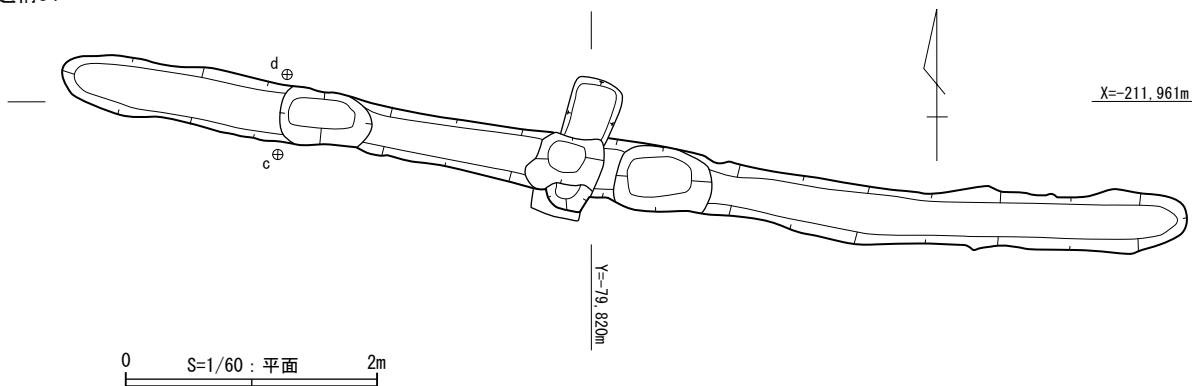


図8 遺構図（中世の溝状遺構）

遺物は瓦器椀（12）や土師器皿などの他に、混入遺物として弥生土器や古代の須恵器や土師器などが出土している。

二つの溝は鎌倉時代前期頃の遺構で、屋敷地を区画する溝であった可能性もある。

③ 小穴・柱穴

遺構 26（図9、図版6） 1区の中央西寄りで見出した土坑で見出した小穴で、平面形状は円形を呈する。規模は長さ0.55m、幅0.52m、深さ0.19mである。断面形状は船底状を呈する。遺物は比較的多く、瓦器椀（13・14）、土師器皿、常滑焼甕などが出土している。鎌倉時代前期頃の遺構であると考えられる。

遺構 39（図9） 1区の中央付近で見出した小穴で、周辺には土坑や小穴が集中している。平面形状は不整形円形で、規模は長さ0.42m、幅0.40m、深さ0.30mである。断面形状は船底状を呈し、遺物は瓦器椀（15）、土師器皿のほか、混入遺物として古代の須恵器坏・甕などが出土している。鎌倉時代前期頃の遺構であると考えられる。

遺構 42（図9、図版6） 1区の中央付近で見出した小穴で、周辺には土坑や小穴が集中している。平面形状は楕円形で、規模は長さ0.53m、幅0.45m、深さ0.15mである。断面形状は船底状である。遺物は瓦器椀、土師器小皿（16）・釜のほか、混入遺物として弥生土器壺の破片が出土している。鎌倉時代前期頃の遺構であると考えられる。

遺構 76・78（図9、図版6） 1区の東端中央付近で見出した小穴で、重複し、遺構76の方が新しい。掘立柱建物を構成する柱穴であったと考えられる。平面形状はどちらも不整形円形を呈し、規模は遺構76が直径約0.40m、深さ0.34m、遺構78が直径0.30m、深さ0.29mである。

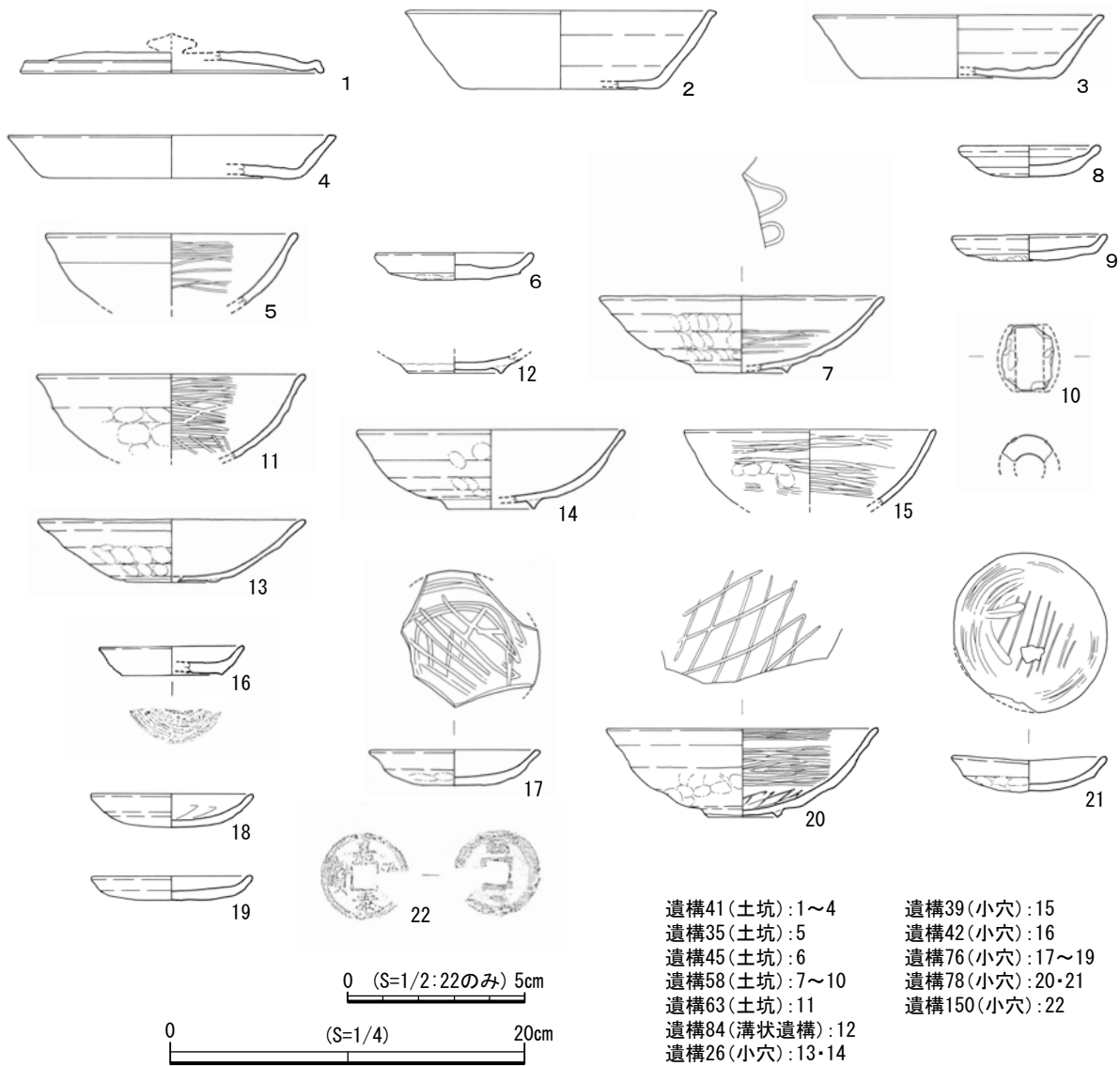


図9 古代・中世の遺構出土遺物

遺物は遺構76から瓦器碗・皿(17)、土師器皿・小皿(18・19)などが、遺構78から瓦器碗(20)・皿(21)、土師器皿が出土しており、鎌倉時代前期に帰属するものであると考えられる。

遺構150(図9、図版6) 2区の北寄りで検出した小穴で、当該期の遺構としては単独で位置する。平面形状は楕円形で、規模は長さ0.30m、幅0.27m、深さ0.24mである。遺物は底に近い位置で銭貨・嘉泰通寶(22)が出土している。

3. 江戸時代の遺構と遺物

近世の遺構には埋桶(遺構4・5・23・27・91ほか)・溜枿(遺構3・132)、土坑(遺構20・30・31)などがある。

埋桶は桶本体が腐朽して残存していなかったが、その痕跡からそれと判断した。桶の直径は1.0m程度が主であるが、1.3~1.5mの規模のものも複数ある。調査区全面に展開しており、計20基を数える。東隣に寺が位置し、桶を座棺とした墓の可能性も考えたが、桶内の堆積が埋

め戻した状況を示し、また、隣接して漆喰を利用した溜桝が存在することからも水溜めなどであった可能性が考えられる。

また、埋桶としたものの中にも、埋土に漆喰を多く含み溜桝の可能性を残すものがあることから、ここでは同時に記述する。また、遺構図の掲載・説明を行うものは埋桶・溜桝・土坑のうち、比較的内容が明らかで特徴的なものについて説明を行う。

なお、遺構の時期は、埋桶が18世紀代に帰属するものが多く、土坑としたものは17世紀代に帰属する。

① 埋桶・溜桝

遺構3 (図10、図版5) 1区の南東隅付近で検出した溜桝で、西側は攪乱により削平される。掘形の平面形状は円形で、規模は直径1.75m、深さ0.73mである。桝の直径は1.10mで、周囲には10cm大の礫を積み上げ漆喰で固めていた。遺物は桝内から近世の肥前系染付碗・青磁碗、施釉陶器鉢、土師質土器焙烙が、掘形から近世の施釉陶器甕などが出土しているが、図示できるものはない。

遺構4・5 (図10・12、図版5・6) 1区の南東隅付近で検出した埋桶で、遺構4の南側に遺構5が接する。

遺構4は掘形の平面形状が円形を呈し、規模は直径1.60m×1.50m、深さ0.74mで、桶痕跡の径は1.10mである。遺物は桶内から近世の肥前系陶器鉢(23)、丹波焼甕(24)、瓦類のほか混入遺物として弥生土器や須恵器が出土している。また、掘形からは近世の施釉陶器碗のほか、混入遺物として弥生土器や中世の瓦器・土師器などが出土している。

遺構5は掘形の平面形状が円形を呈し、規模は直径1.45m×1.35m、深さ0.60mで、桶痕跡の径は1.15mである。遺物は桶内から近世の肥前系染付碗・皿・青磁香炉、肥前系陶器碗・皿・鉢、焼締陶器甕・擂鉢、瓦類のほか混入遺物として弥生土器や中世の備前焼、山茶碗、土師器皿などが出土している。また掘形の混入遺物としては中世の土師器皿がある。

遺構23 (図10・12、図版5・6) 1区の中央付近で検出した埋桶で、北側には同時期の遺構22が位置する。掘形の平面形状は円形を呈し、規模は直径1.40m、深さ0.86mで、桶痕跡の径は0.97mである。遺物は桶内から近世の肥前系陶器碗(25)、中世に遡る可能性もある備前焼水屋甕(26)、瓦類のほか混入遺物と古代の須恵器や土師器が出土している。

遺構28・33 (図10・12、図版5・7) 1区の南西端付近で検出した埋桶で、遺構28と遺構33は重複し、遺構28の方が新しい。

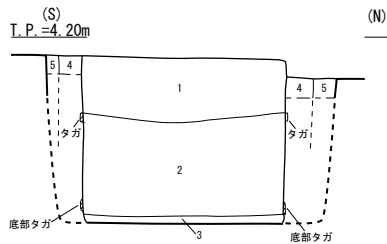
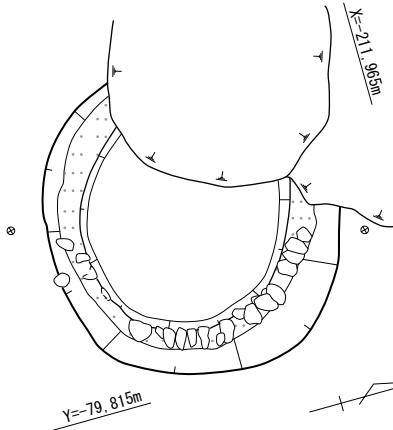
遺構28は掘形の平面形状が不整円形を呈し、規模は直径1.35m×1.25m、深さ0.71mで、桶痕跡の径は1.00mである。遺物は桶内から近世の肥前系染付碗(27)・皿、肥前系陶器皿などが出土している。

遺構33は南半分が調査区域外となるが、掘形の平面形状は不整円形を呈すると考えられる。規模は直径1.35m、深さ0.71mで、桶痕跡の径は1.05mである。遺物は桶内から近世の肥前系陶器鉢や備前焼壺(28)・甕、土師質土器焙烙(29)などが出土している。

遺構132・133 (図11・12、図版5・7) 2区の中央付近で検出した埋桶(遺構133)と溜桝(遺構132)で、遺構133を切り込んで遺構132が位置する。

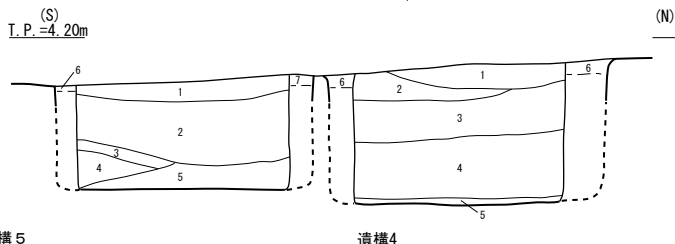
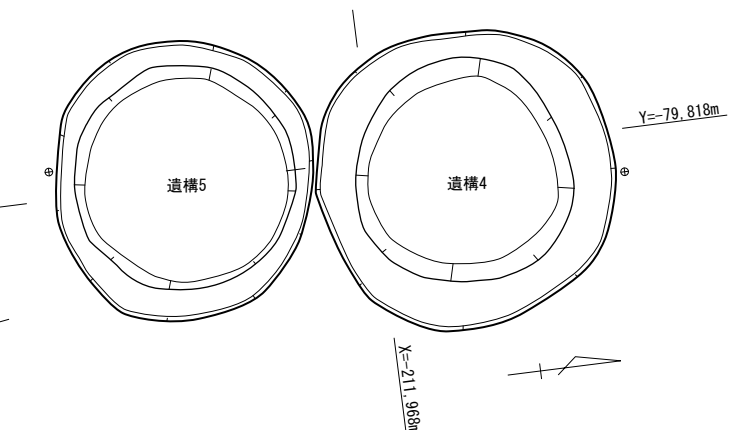
遺構132は掘形の平面形状が楕円形を呈し、規模は長さ1.55m、幅1.43m、深さ0.55mで、

遺構3



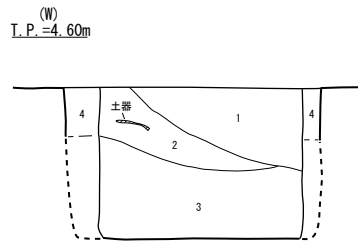
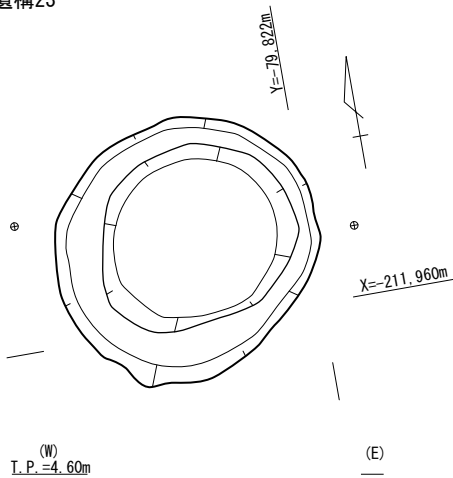
1. 2.5Y4/2 暗灰黄シルトに2~10cm大の礫を中量含む+10YR4/3にぶい黄褐砂質土
2. 10Y5/1 灰弱粘質土 5~20cmの礫を中量含む
3. 10Y4/1 灰粘土 (貼土)
4. 10cm大の川原石を積み5Y7/3 浅黄漆喰土を充填する 0.5~8cm大の礫中量含む
5. 5Y5/1 灰 弱粘質土に5Y6/4 オリーブ黄漆喰土がブロック状 (2~4cm大) に入る 裏込土

遺構4・遺構5



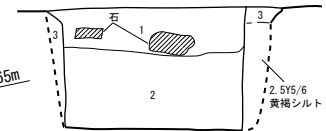
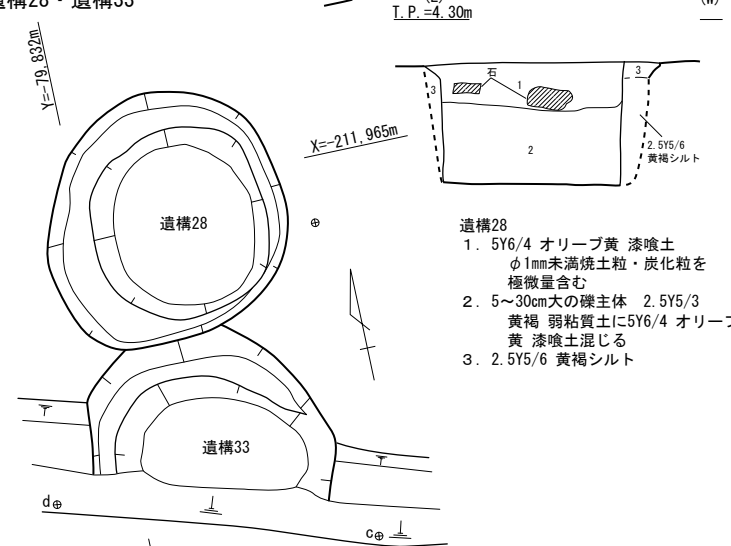
- | | |
|--|--|
| <p>遺構5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y6/4 にぶい黄漆喰土+2.5Y5/3 黄褐シルト +10YR4/3 にぶい黄褐砂質土 2. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 3. 5Y5/1 灰粘土+2.5Y4/3 オリーブ褐シルト少量 4. 5Y6/4 オリーブ黄シルト+5Y3/1 オリーブ黄焼土 5. 5Y4/1 灰粘土 0.5~2cm大の礫を少量含む 6. 7.5Y5/4 黄褐漆喰土 7. 2.5Y4/2 暗灰黄シルト+6層が粒状に入る | <p>遺構4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 5Y6/2 灰オリーブシルト 2. 2.5Y6/4 にぶい黄漆喰土+5Y6/2 灰オリーブシルト +2.5Y3/1 黒褐焼土 3. 5Y6/3 オリーブ黄砂質土 0.5~3cm大の礫を多量に含む 4. 2~10cm大の礫が主体 2.5Y5/1 灰粘土混じる 5. 7.5Y5/1 灰粘土 (貼土) 6. 2.5Y6/4 にぶい黄漆喰土 |
|--|--|

遺構23

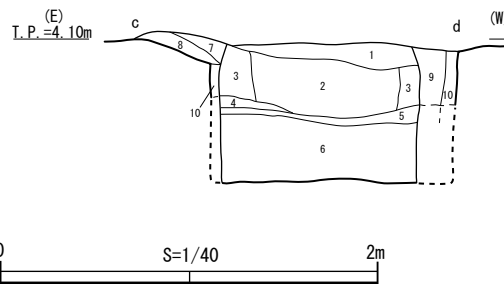


1. 2.5Y4/2 暗灰黄シルトに10YR5/4 にぶい黄褐漆喰土ブロック状に少量入る砂質土
2. 10YR5/4 にぶい黄褐漆喰土主体 10YR4/2 灰黄褐シルト 弱粘質土混じる
3. 2~10cm大の礫主体 2.5Y5/3 黄褐シルト混じる
4. 10YR5/2 灰黄褐シルト

遺構28・遺構33



- 遺構28
1. 5Y6/4 オリーブ黄 漆喰土 φ1mm未満焼土粒・炭化粒を極微量含む
 2. 5~30cm大の礫主体 2.5Y5/3 黄褐 弱粘質土に5Y6/4 オリーブ黄 漆喰土混じる
 3. 2.5Y5/6 黄褐シルト



- 遺構33
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルトに5Y6/3 オリーブ黄漆喰土が粒状に入る 焼土粒・炭化粒を微量含む
 2. 2~20cm大の礫主体 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト混じる
 3. 2.5Y4/1 黄灰シルト
 4. 2.5Y4/3 オリーブ褐弱粘質土
 5. 5Y6/3 オリーブ黄漆喰土 (一時の底?)
 6. 2.5Y4/4 オリーブ褐弱粘質土 礫を中量含む
 7. 5Y6/3 オリーブ黄漆喰土
 8. 2.5Y6/3 にぶい黄シルト
 9. 2.5Y5/2 暗灰黄シルト (桶裏込土)
 10. 2.5Y4/4 オリーブ褐シルト (桶裏込土)

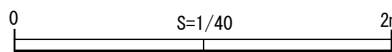


図10 近世の遺構 (1)

柵の径は1.20 mである。検出時には埋桶と判断していたが、壁の一部に漆喰が確認できたことから溜柵と判断した。遺物は柵内から多くの土器類が出土しており、これらには近世の肥前系染付碗蓋(30)・碗(31・32)・皿・鉢・磁器御神酒徳利・青磁香炉、焼締陶器碗・皿・鉢・鍋、土師質土器皿・焙烙(33)、瓦類などがある。

遺構133は南側が遺構132によって削平されるが、平面形状は円形を呈していたと考えられ、規模は直径1.37 m、深さ0.53 mで、桶痕跡は直径1.05 mである。遺物は出土していない。

遺構142・145(図11・12、図版7) 2区の北西側で検出した埋桶で、遺構142は西側が、遺構145は南側が調査区域外となり全容は不明である。平面形状はともに円形に近いと考えられる。

遺構142は掘形の規模が直径1.00 m以上、深さ0.45 mで、桶痕跡は直径0.80 m以上である。遺物は桶内から近世の肥前系染付碗(34)が出土している。

遺構145は掘形の規模が直径1.20 m、深さ0.80 mで、桶痕跡は直径0.90 m以上である。遺物は桶内から近世の肥前系染付碗(35)、堺・明石系陶器播鉢が出土している。

② 土坑

遺構20(図11・12、図版7) 1区の中央東寄りで検出した土坑で、西側が攪乱により削平される。平面形状は楕円形を呈していたと考えられ、規模は長さ1.45 m、幅0.90 m以上、深さ0.31 mである。遺物は多く出土しており、近世の肥前系染付皿・瓶・磁器碗、肥前系陶器鉢(36・37)・壺、備前焼播鉢(38)・壺(39・40)・甕、瓦質土器火鉢、茶臼(41)、瓦類のほか混入遺物として古代・中世の土器類が出土している。

遺構22(図11・12、図版5・7) 1区の中央付近で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ1.43 m、幅1.17 m、深さ0.59 mで、断面形状は埋桶と同様に逆台形を呈する。遺物は近世の肥前系染付蕎麦猪口、肥前系陶器碗(42)、備前焼甕(43)、瓦質土器壺のほか、混入遺物として弥生土器が出土している。

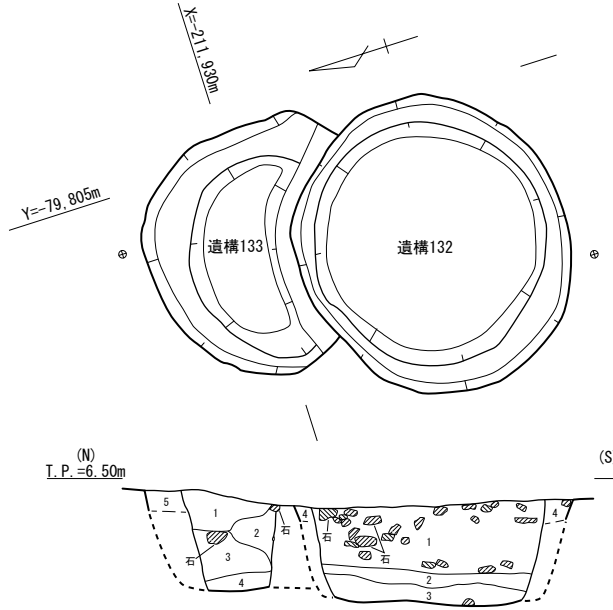
遺構30(図11・12、図版6・7) 1区の中央西寄りで検出した土坑で、平面形状は不整楕円形を呈する。規模は長さ1.45 m、幅1.20 m、深さ0.48 mで、断面形状は逆台形を呈し、規模も含め遺構22と似通っており、図を提示していないが遺構31とも内容が類似する。遺物は近世の肥前系陶器皿(44)、土師質土器焙烙のほか、混入遺物として弥生土器や中世土師器皿、銭貨(45)などが出土している。

4. 包含層などからの出土遺物(図13、図版7・8)

近世・中世の包含層である第2・3層や、中世遺構のベースとなる第4・5層及び後世の遺構へ混入して出土した遺物には弥生時代以降近世にかけての遺物がある。

これらのうち、弥生時代中期の土器には壺(46～50)・甕(51)・台付鉢(52)・高坏(53)、弥生時代後期の壺(54・55)・甕(56)・高坏(57・58)がある。古代の土器では須恵器坏蓋(59～61)・坏身(62)・壺(64)、黒色土器碗(63)がある。また、中世の土器では瓦器皿(65・66)、土師器小皿(67)、山茶碗(68)、瓦質土器甕(69)・備前焼壺(70)がある。このほか、近世の土器では瀬戸美濃系陶器天目碗(71・72)、備前焼鉢(73)、堺・明石系陶器播鉢(74)などがある。

遺構132・遺構133



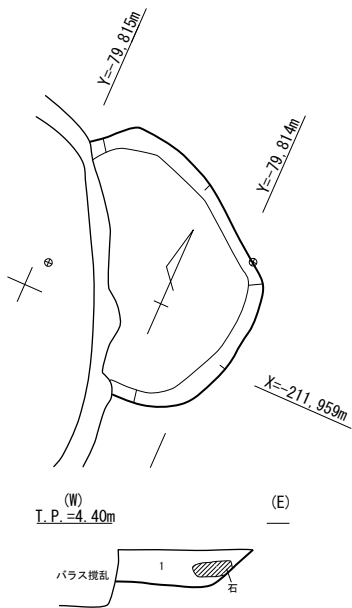
遺構133

- 10YR4/2 灰黄褐シルト 3cm前後の礫・2.5Y6/6 明黄褐漆喰土を含む
- 2.5Y4/1 黄灰シルト
- 10YR4/2 灰黄褐シルト 2.5Y6/6 明黄褐漆喰土を含む
- 2.5Y5/1 黄灰シルト
- 10YR4/1 褐灰シルト

遺構132

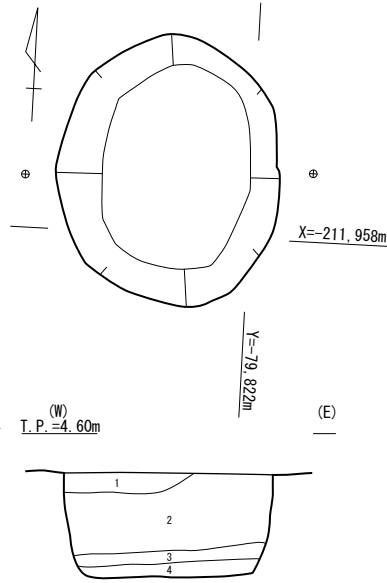
- 10YR4/2 灰黄褐シルト 10cm前後の礫・漆喰塊を多く含む
- 2.5Y6/6 明黄褐漆喰土+10YR4/2 灰黄褐シルト
- 2.5Y4/1 黄灰シルト
- 2.5Y5/1 黄灰シルト 10YR4/4 褐の鉄分を斑に含む

遺構20

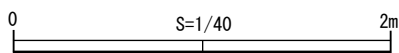


- 2.5Y4/2 暗灰黄シルト 炭化粒・焼土粒・焼土塊を中量含む 2~20cm大の礫を少量含む

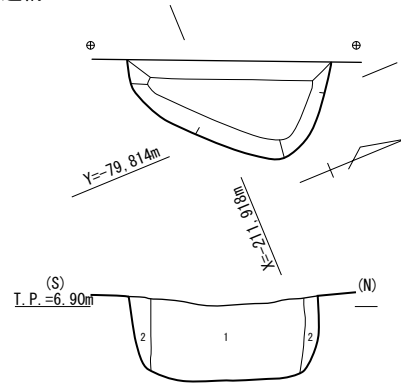
遺構22



- 2.5Y4/2 暗灰黄シルトに2.5Y6/4 にぶい黄漆喰土がブロック状に少量入る
- 10YR4/2 灰黄褐シルトにφ1~5mm大の焼土粒・炭化粒が入る 2.5Y5/4 黄褐漆喰土がブロック状に入る(S)
- 2.5Y5/4 黄褐漆喰土
- 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト

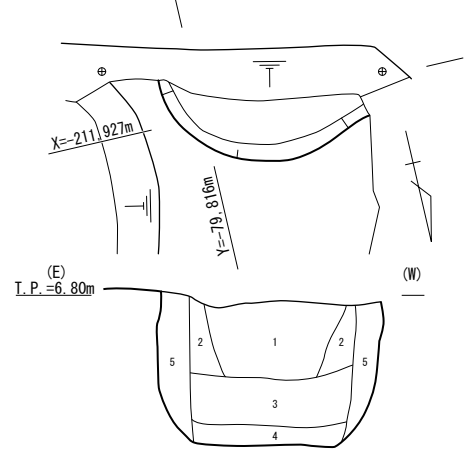


遺構142



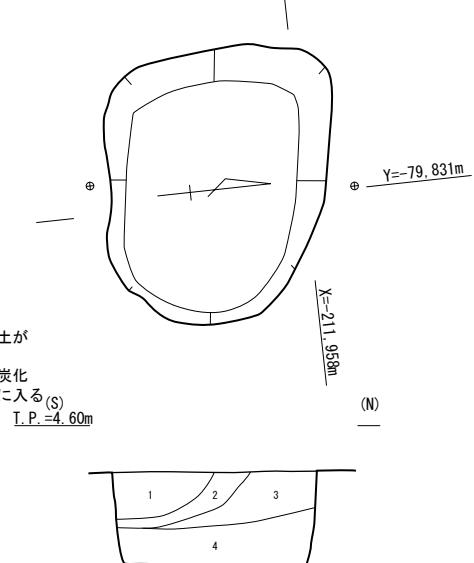
- 5Y5/2 灰オリーブ砂質土に2.5Y5/6 黄褐漆喰土がブロック状に多量に入る
- 2.5Y5/6 黄褐漆喰土

遺構145



- 2~10cm大の礫主体 2.5Y4/2 暗灰黄砂質土混じる
- 2.5Y5/4 黄褐シルト 礫を少量含む
- 2.5Y4/4 オリーブ褐弱粘質土
- 2.5Y5/3 黄褐粗砂混じり弱粘質土
- 5Y6/4 オリーブ黄漆喰土

遺構30



- 2.5Y4/2 暗灰黄シルト φ1mmの炭化粒・焼土粒を微量含む
- 2.5Y4/1 黄灰シルト(焼土) 炭を多量に焼土粒を微量含む
- 2.5Y5/4 黄褐シルト
- 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト

図11 近世の遺構(2)

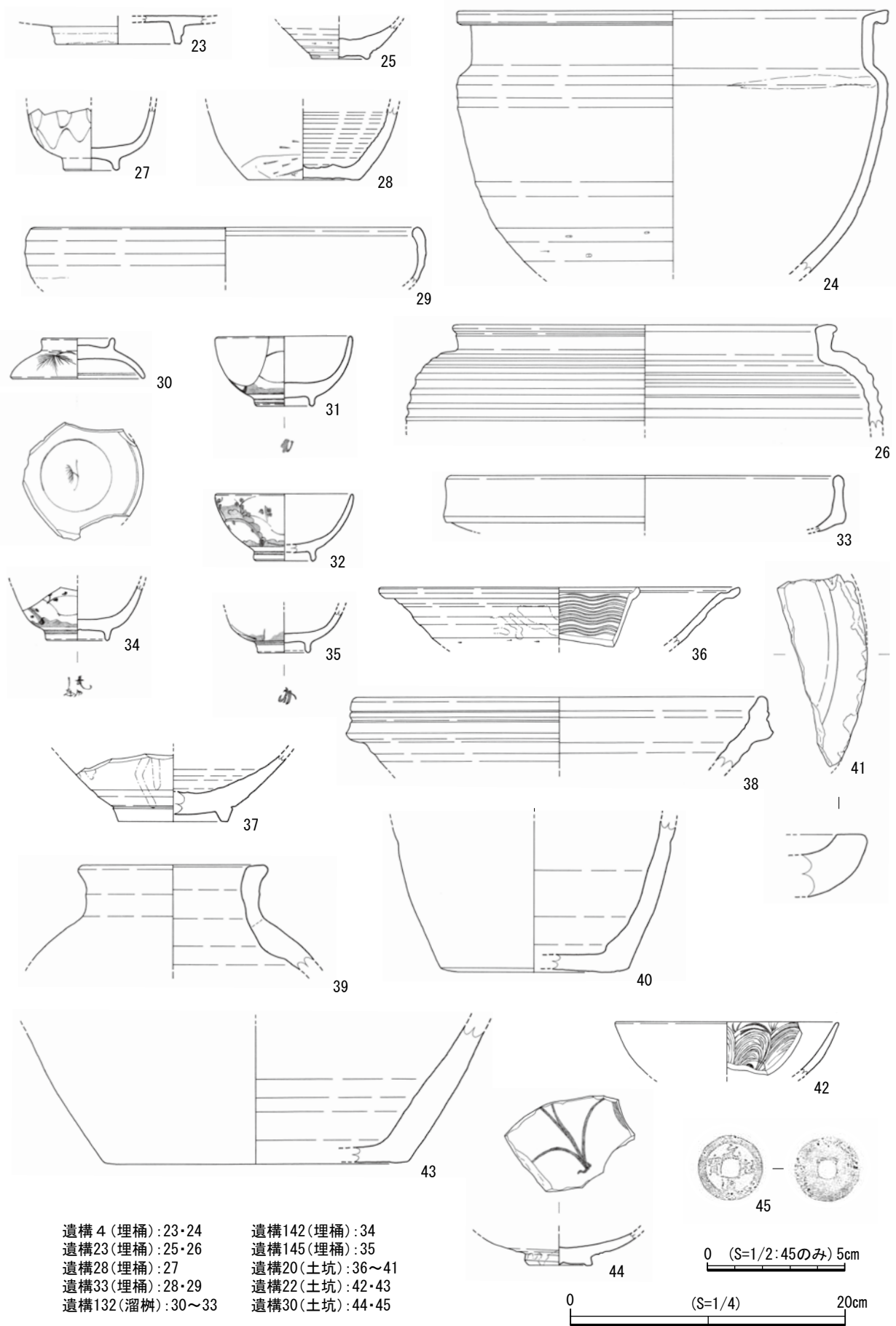


図 12 近世の遺構出土遺物

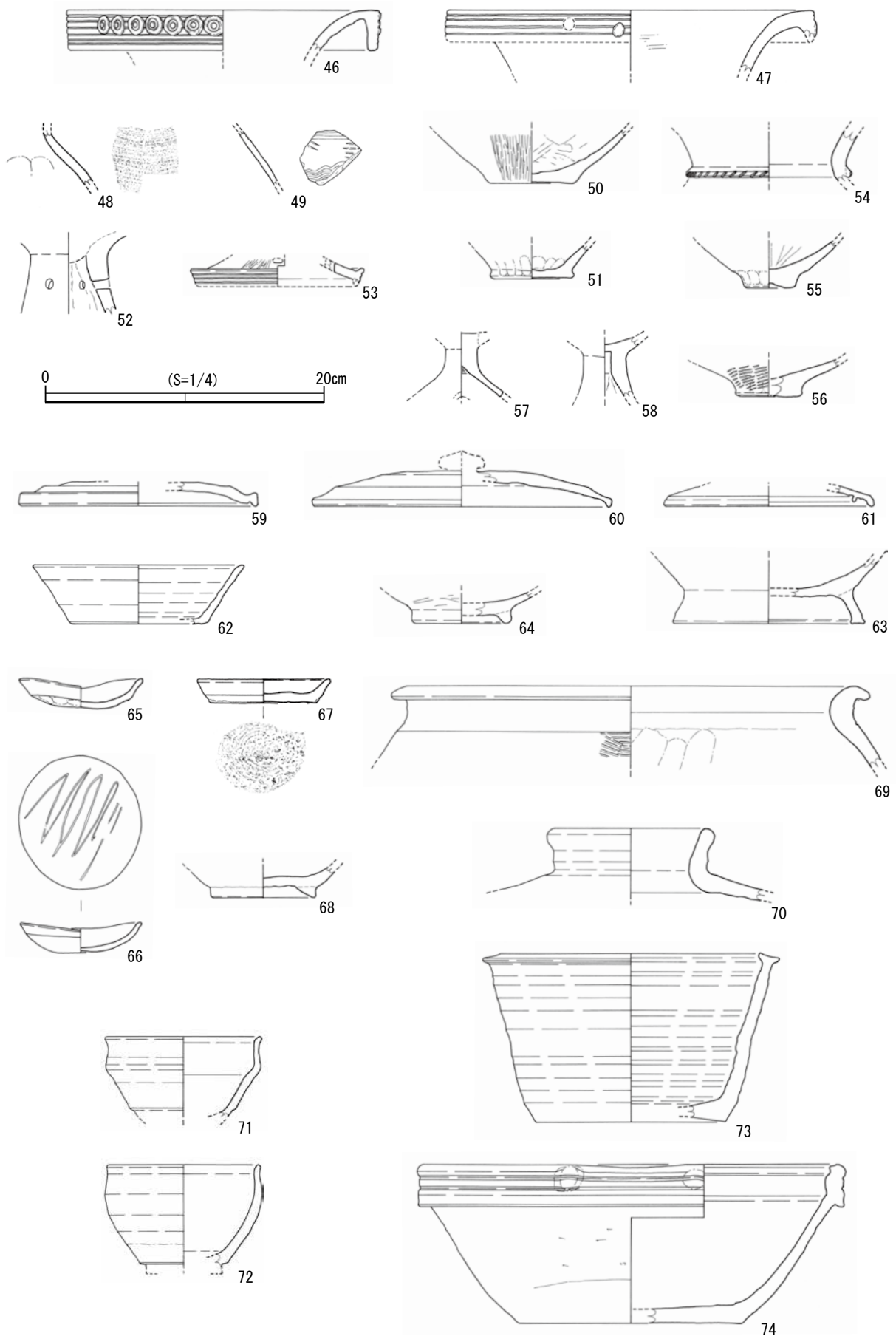


図 13 包含層などの出土遺物

第5章 まとめ

新堂遺跡付近では弥生時代以降、人々が生活していたことが明らかになった。弥生土器は古代および中世遺構のベースとなる第4・5層に含まれている。先にも触れたようにこれらの層は土石流によって形成されたもので、第4層には弥生時代後期の土器、第5層には弥生時代中期の土器が主として含まれており、付近では弥生時代以降繰り返し土石流があったことが窺える状況である。また、2区では一様な層位でないものの中世以降も土石流を示す礫の堆積が見られ、付近の地盤が脆弱であったことが分かる。このことは遺跡内の観音寺境内にある蛇白神社が、大正時代にあった土石流が由来で祀られたものであることから窺うことができる。

弥生土器については遺構に伴うものでなく、土石流で形成された層位に含まれることから、調査区より山寄りの谷あいには集落が営まれていたと考えられる。弥生時代中期の土器については、近くから出土した大峯銅鐸（新堂銅鐸）と同じ時期のもので関連が注目されよう。また、弥生時代後期前半から中頃の土器類が出土しないことから、この間に集落が断絶している可能性がある。この現象については同時期に出現する高地性集落の存在が無視できない事柄ではあるが、新堂遺跡周辺から移動した高地性集落は現段階では明らかになっていない。

古墳時代の遺物は数量的に限られ、遺構も確認できていない。古代の遺構は土坑のみであるが、遺物は包含層などからも一定量出土しており、集落が展開していたことが予想できる。有田川下流域の古代に遡る寺院は、平野部ではなく丘陵裾あるいは谷あいには立地することなどからも、当該期に至っても平野部に集落が展開していなかった可能性があり、有田川下流域の平野部が安定するのは、城館などが築かれるようになる中世以降であったと捉えることができる。

中世の遺構は多く、調査区域外への展開も予想できることから周辺に広く集落が展開していたと考えられる。また、遺跡内にある観音寺には中世墓があり、集落に近接して墓地が営まれていたことが窺える。

遺物では鎌倉時代の土器類が主を占め、室町時代の遺物はやや少なくなる傾向がある。鎌倉時代の供膳具では、瓦器・土師器などがある。出土した瓦器と土師器の比率は拮抗するが、土師器は古代と鎌倉時代のものでは判別が難しい。遺構から出土する土器のうち、形状が把握できるものは圧倒的に瓦器が多く、これは図化できた資料からも明らかである。ところで、有田川町の野田地区遺跡、藤並地区遺跡の調査では、供膳具の瓦器と土師器の比率では圧倒的に瓦器が多いことが知られており、土師器が瓦器より多くを占める紀の川流域とは異なる組成を示す。新堂遺跡の場合も、鎌倉時代のみ捉えた場合、瓦器の比率が土師器よりかなり多いものと考えられる。

表1 遺物観察表

法量の0内は復元した大きさ +はそれ以上。 色調の内・外・断は「面」を省略している。
 色調は基本的に土色帖を参考にし、マンセル記号を省略している。

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	地区	遺構 番号	法 量 (cm)			残存率	形態・技法	色 調	胎 土	備 考
					口径	高さ	底径					
1	図9 図版6	須恵器 坏蓋	1 I10f15	41	(16.8)	1.15+	-	10%	外面回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面回転ナデ、ナデ	内外断：灰	密 1mmまでの 白色砂粒を含む	反転復元 8世紀後半
2	図9 図版6	須恵器 坏	1 I10f15	41	(16.7)	4.4	(11.0)	35%	内外面回転ナデ 内外底部摩 滅により調整不明	内外断：にぶい 黄橙、灰白	1mmまでの白色 砂粒等を多く含 む	反転復元 焼成不良軟質 8世紀後半
3	図9 図版6	須恵器 坏	1 I10f15	41	(16.3)	3.5	(11.0)	40%	内面・外面体部回転ナデ 外 底部回転ヘラ切	内外：灰白	密	反転復元 やや軟質 8世紀後半
4	図9 図版6	須恵器 皿	1 I10f15	41	(18.2)	2.4	(14.4)	15%	外面回転ナデ 外底部回転ヘ ラ切 内面回転ナデ、ナデ	内外断：灰	密	反転復元 やや軟質 8世紀後半
5	図9	瓦器 椀	1 I10h14・15	35	(14.0)	4.1+	-	10%	外面ヨコナデ、ナデ 内面ヘ ラミガキ	内外：灰、灰白 断：灰	密	反転復元 13世紀前半～
6	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10e15	45	(8.6)	1.45	(7.2)	45%	内外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ	内外断：橙	密 1mm前後の 赤色酸化粒等含 む	反転復元 13世紀
7	図9 図版6	瓦器 椀	1 I10h14	58 南半	(16.0)	4.3	(5.2)	60%	断面三角形の高台 口縁部ヨ コナデ 外面体部ユビオサ エ 内面ヘラミガキ不鮮明	内外：灰～暗灰 断：灰白	密 細かい白色 砂粒少量含む	反転復元 13世紀前半
8	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10h14	58 南半	(7.5)	1.7	(4.4)	25%	口縁部ヨコナデ 内外面底体 部ユビオサエ・ナデ	内外断：橙	密	反転復元 13世紀
9	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10h14	58 南半	8.5	1.4	7.2	90%	口縁部ヨコナデ 内外面底体 部ユビオサエ・ナデ	内外断：にぶい 橙	1mm位の赤色酸 化粒を微量含む	13世紀
10	図9	土製品 土鍾	1 I10h14	58 南半	長さ 3.8	復元径 3.5	孔径 (1.6)	25%	紡錘状	内外：にぶい橙 断：橙	1～3mm位の石 英少量、2mmま での赤色酸化粒 を少量含む	
11	図9	瓦器 椀	1 I10d14・15	63 西半	(14.8)	4.75+	-	10%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ 内面ヘラミガキ・見込 み部分割	内外：灰 断： 灰白	密	反転復元 12世紀末～ 13世紀前半
12	図9	瓦器 椀	1 I10f16	84	-	0.9+	(5.2)	高台部 40%	断面三角形の高台 全体的に 摩滅 内面ヘラミガキか？	内外：灰 断： 灰白	密 微砂粒多く 含む	反転復元 13世紀
13	図9 図版6	瓦器 椀	1 I10h15	26	(15.0)	3.5	(5.1)	40%	形骸化した低い高台 口縁部 ヨコナデ 外面体部ユビオサ エ 内面底体部摩滅暗文不明	内：灰褐～にぶ い橙 外：暗灰 黄～にぶい橙 断：淡赤橙	密 細かい白色 砂粒を少量含む	反転復元 二次焼成？ 13世紀
14	図9 図版6	瓦器 椀	1 I10h15	26	(15.0)	4.5	(4.8)	50%	断面三角形の高台 口縁部ヨ コナデ 外面体部ユビオサエ 内面底体部摩滅暗文不明	内外：灰黄褐 断：にぶい黄橙	密	反転復元 13世紀
15	図9	瓦器 椀	1 I10e15	39	(14.0)	4.2+	-	10%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ・ヘラミガキ 内面ヘラ ミガキ・ナデ	内外：灰 外： 灰・灰白 断： 灰白	密	反転復元 12世紀末～ 13世紀前半
16	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10e15	42	(8.0)	1.6	(5.6)	25%	外面ヨコナデ 外底部回転糸 切 内面ヨコナデ・ナデ	内外断：橙	密 1mmまでの 砂粒を含む	反転復元 13世紀？
17	図9 図版6	瓦器 皿	1 I10d16	76	(9.4)	1.95	-	50%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ 内面ナデのちヘラミガ キ・見込み部分割	内外：灰 断： 灰白	密	反転復元 12世紀末～ 13世紀
18	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10d16	76	(9.0)	1.8	-	60%	外面ヨコナデ、ナデ 内面ヨ コナデ、工具によるナデ	内外断：淡赤橙・ 淡橙	密	反転復元 13世紀
19	図9 図版6	土師器 小皿	1 I10d16	76	(8.8)	1.3	-	40%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ？ 内面ヨコナデ、ナ デ？	内外断：にぶい 橙	密 1mm前後の 赤色酸化粒等含 む	反転復元 13世紀
20	図9 図版6	瓦器 椀	1 I10c16・d16	78	(15.2)	4.9	4.0	45%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ 内面体部同心円状密な ヘラミガキ・見込み部分割斜 格子ヘラミガキ	内外断：灰白～ 灰	密	反転復元 12世紀末～ 13世紀
21	図9 図版6	瓦器 皿	1 I10c16・d16	78	8.4～ 8.9	2.0	-	90%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ 内面ナデのちヘラミガ キ・体部同心円状、見込み部 平行線分割	内外：灰～灰白 断：灰	密 1～3mmの 長石・赤色酸化 粒等含む	12世紀末～ 13世紀
22	図9 図版6	銭貨	2 I10b6	150	直径 2.47	-	厚さ 0.13	85%	嘉泰通寶(南宋) 背「四」「一」 鑄潰れあり	-	-	初鑄(1201年)
23	図12 図版6	肥前系 唐津？鉢	1 I10e17	4 上層	-	2.0+	(9.0)	高台部 45%	鉄釉 高台・高台内露胎 内 底部白土で刷毛目	釉：褐灰～黒褐 露胎：にぶい 赤褐 断：褐灰	密	反転復元 18世紀
24	図12 図版6	丹波焼 甕	1 I10e17	4 桶内東	(31.3)	19.0+	-	20%	鉄釉 内面回転ナデ 外面回 転ナデ・回転ヘラケズリ	内外：黒褐～灰 赤 露胎・断： 赤褐	密 細かい白色 砂粒少量含む	反転復元 18世紀
25	図12 図版6	肥前系 唐津碗	1 I10f15	23	-	2.5+	4.1	高台部 90%	灰釉 外底部露胎 外面回転 ナデ・回転ヘラケズリ	釉：黄灰 露胎： にぶい褐～にぶ い橙 断：にぶ い褐	密 細かい白色 砂粒を少量含む	一部反転復元 17世紀
26	図12 図版6	備前焼 水屋甕	1 I10	23 北半	(27.0)	7.3+	-	口縁部 20%	口縁部は短く立ち上がり、端 部はわずかに外方に拡張 内 外面回転ナデ・肩部はクロク 目顕著	内：褐灰 外： 暗赤褐 断：褐 灰・暗灰	密 1mm前後の 長石粒等含む	反転復元 16～17世紀
27	図12 図版7	肥前系 染付碗	1 I10	28 桶内	-	4.5+	3.8	50%	全釉 豊付釉剥ぎ 外面染付 (一重網目文)	釉：明オリーブ 灰 呉須：暗青 断：灰白	緻密	一部反転復元 17世紀

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	地区	遺構 番号	法 量 (cm)			残存率	形態・技法	色 調	胎 土	備 考
					口径	高さ	底径					
28	図 12 図版 7	備前焼 壺	1 I10hi17	33	-	5.2+	(8.0)	底部 50%	外面回転ナデ、ヘラケズリ 外底部ヘラケズリ 内面回転 ナデ・ロクロ目顕著	内：暗赤褐 外： 灰褐 断：褐灰	密 1～3mm の 長石粒等含む	反転復元 17世紀
29	図 12	土師質土 器 焙烙	1 I10hi17	33	(27.6)	4.0+	-	5%以下	内外面回転ナデ、ナデ	内外断：にぶい 橙	1mmまでの白色 砂粒・赤色酸化 粒・金雲母含む	反転復元 外面スス付着 17世紀
30	図 12 図版 7	肥前系 染付碗蓋	2 I10 b 8	132 西半	(9.6)	2.9	摘み径 5.2	55%	総釉 摘み端部釉剥 外面染 付切枝松葉文 2 方向 内面染 付圏線 切枝松葉文	釉：淡青灰 呉 須：淡藍 断： 灰白	緻密	反転復元 18世紀
31	図 12 図版 7	肥前系 染付碗	2 I10 b 8	132 西半	(9.6)	5.1	4.0	50%	総釉 量付釉剥 外面染付圏 線・草花文 高台内銘「？」	釉：淡青灰 呉 須：藍 断：灰 白	緻密	反転復元 18世紀
32	図 12 図版 7	肥前系 染付碗	2 I10 b 8	132 西半	(9.9)	4.85	(4.2)	50%	総釉 量付釉剥 外面染付圏 線・草花文	釉：灰白（光沢 無） 呉須：藍 断：灰白	緻密	反転復元 18世紀
33	図 12 図版 7	土師質土 器 焙烙	2 I10 b 8	132 西半	(27.8)	4.1+	(28.6)	5%	外面から内面ヨコナデ 外底 部未調整 外面スス付着	内：橙 外：に ぶい赤褐	やや粗い 1mm 前後の白色粒・ 赤色酸化粒を多 く含む	18世紀
34	図 12 図版 7	肥前系 染付碗	2 I10c4・5	142	-	4.0+	(4.4)	50%	総釉 量付釉剥 外面染付圏 線・草花文 高台内「大明年 製」	釉：淡青灰 呉 須：藍 断：灰 白	緻密	反転復元 18世紀
35	図 12 図版 7	肥前系 染付碗	2 I10e7	145	-	3.0+	3.6	30%	総釉 量付釉剥・珪砂多く付 着 外面染付圏線・草花文 高台内銘「？」	釉：淡青灰 呉 須：藍 断：灰 白	緻密	反転復元 18世紀
36	図 12 図版 7	肥前系 唐津鉢	1 I10d15	20	(25.8)	4.2+	-	5%以下	口縁部折り曲げ 外面口縁部 から内面にかけて灰釉 内面 白土で波状の刷毛目	釉：黒・灰白 露胎：褐灰 断： 灰	密 細かい白色 砂粒を少量含む	反転復元 17世紀
37	図 12 図版 7	肥前系 唐津鉢	1 I10d15	20	-	4.8+	(8.0)	高台部 30%	灰釉 外底部露胎 外面回転 ナデ・回転ヘラケズリ	釉：赤灰 露胎： にぶい赤褐 断：にぶい赤褐・ にぶい赤褐・褐 灰	密 細かい白色 砂粒を中量含む	反転復元 17世紀
38	図 12 図版 7	備前焼 播鉢	1 I10d15	20	(29.3)	5.2+	-	口縁部 15%	口縁部端部肥厚して上方に拡 張 外端面に凹線 2 条 内外 面回転ナデ 外面自然釉	内外：灰赤 断： 灰赤・灰	密 細かい白色 砂粒を中量含む	反転復元 17世紀
39	図 12 図版 7	備前焼 壺	1 I10d15	20	(13.2)	7.6+	-	口縁部 50%	後円部上方に立ち上がり端部 を外方にわずかに拡張し上方 に面 内外面回転ナデ 外面 自然釉	内外：黒褐 断： 黄灰 自然釉： 灰黄	密 細かい白色 砂粒を多く含む	反転復元 40と同一個体 か
40	図 12 図版 7	備前焼 壺	1 I10d15	20	-	11.0+	(13.5)	底部 40%	内外面回転ナデ 外底部未調 整 自然釉内外に部分的にか かる	内：黒褐 外： 黒褐 断：黄灰	密 φ～2mmく らいの石英中量 含む	反転復元 39と同一個体 か
41	図 12 図版 7	石製品 茶臼	1 I10d15	20	直径 (36.0)	4.5+	-	5%以下	下臼		砂岩	
42	図 12 図版 7	肥前系 唐津碗	1 I10f15	22	(16.0)	3.8+	-	口縁部 10%	灰釉？ 内面白土で波状の刷 毛目	釉：黒褐 刷毛： 灰白 断：灰褐	密	反転復元 17世紀
43	図 12	備前焼 甕	1 I10f15	22	-	10.0+	(22.0)	5%以下	内外面回転ナデ	内：赤褐 外： 灰赤～暗赤灰 断：暗赤灰・灰 ・灰白	密 細かい白色 砂粒を少量含む	反転復元 17世紀
44	図 12 図版 7	肥前系 唐津皿	1 I10h15	30 東半	-	2.3+	4.5	高台部 95%	灰釉 高台付近露胎 内面鉄 絵（草花文？）	釉：黄灰 鉄絵： 黒 露胎：にぶ い黄橙	密 細かい白色 砂粒を少量含む	一部反転復元 17世紀
45	図 12 図版 6	銭貨	1 I10h15	30	2.39	2.38	厚さ 0.10	100%	元祐通寶（北宋） 銭文やや 鑄潰れあり 裏面外縁・方孔 縁なし 模鑄銭か	-	-	初鑄(1086年)
46	図 13 図版 7	弥生土器 壺または 器台	1 I110	表土等	(22.2)	2.9+	-	口縁部 15%	口縁部垂下 外端面に細い凹 線文 6 条巡らし、その上に竹 管文を押す円形浮文を密に配 する 内外面ヨコナデ・ナデ	内外：橙～橙 断：灰～黒	1～2mmく らいの石英・赤 色酸化粒を中 量含む	反転復元 弥生時代中期 後葉
47	図 13 図版 7	弥生土器 壺	1 I110	表土等	(25.9)	4.4+	-	口縁部 15%	口縁部垂下 外端面に細い凹 線文 4 条以上巡らし、その上 に円形浮文を配する 内外面 ヨコナデ・ナデ	内：にぶい橙 外：橙 断：浅 黄橙	1～4mmく らいの石英・チャ ートを中量、1～ 2mmの赤色酸化 粒を少量含む	反転復元 弥生時代中期 後葉
48	図 13 図版 7	弥生土器 壺	1 I110g16	下層確 認トレ ンチ	-	3.9+	-	5%以下	外面櫛描直線文 3 条以上	外：橙 内：明 褐 断：褐灰	1mm前後の長 石粒等含む	弥生時代中期
49	図 13 図版 7	弥生土器 壺	1 北端 I110	表土等	-	3.9+	-	5%以下	体部外面櫛描直線文・波状文	内：灰白 外： にぶい橙 断： 暗灰	密 1～3mm の 長石粒、1mm以 下のチャート・ 赤色酸化粒を少 量含む	弥生時代中期
50	図 13 図版 7	弥生土器 壺	1 I110f14	下層確 認トレ ンチ	-	3.8+	6.0	底部 50%	外面タテ方向ヘラミガキ 内 面工具不整方向ナデ	内：暗灰 外面： 浅黄橙	1mm前後の石 英・片岩粒等多 く含む	反転復元 弥生時代中期
51	図 13 図版 8	弥生土器 甕	1 I110	東側溝	-	2.4+	(5.4)	底部 60%	底端部外方にわずかに突出・ ユビオサエ	内：黄灰 外： にぶい褐、黒 （底）	1～4mmの石 英・片岩粒含む	反転復元 弥生時代中期

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	地区	遺構 番号	法 量 (cm)			残存率	形態・技法	色 調	胎 土	備 考
					口径	高さ	底径					
52	図 13 図版 8	弥生土器 台付鉢	2 I10e11	123	-	5.7+	-	脚台部 50%	脚柱部円穴6か所 外面摩滅 調整不明 内面シボリ	内外：橙 断： 浅黄橙・褐灰	粗い 1～2mm 大の石英・片岩 等多く含む	混入遺物 弥生時代中期
53	図 13 図版 8	弥生土器 高坏	1 I10	表土等	-	1.9+	(11.2)	脚台部 10%	脚台端部を上下に拡張 外端 面に細い凹線を3条巡らす 円穴を穿つ ヨコナデ・ナデ・ ヘラミガキ	内外：橙 断： にぶい橙	密 1～2mm の 長石粒等少量含 む	反転復元 弥生時代中期
54	図 13 図版 8	弥生土器 壺	2 I10d10	包含層	-	3.7+	-	5%以下	頸部にキザミ目を有する突帯 全体的に摩滅 内面ナデ	内断：褐灰 外： 明赤褐	1mm前後の石英・ 片岩粒等含む	反転復元 弥生時代後期
55	図 13 図版 8	弥生土器 壺	2 I10d11	包含層	-	3.3+	3.6	底部 80%	外面ユビオサエ 内面板状工 具による放射状ナデ	内外：橙～浅黄 橙 断：浅黄橙	密 1～2mm の チャート・石英 等含む	反転復元 弥生時代後期
56	図 13 図版 8	弥生土器 甕	2	中世 ベース 層	-	2.6+	(4.4)	底部 40%	外面やや右上がり平行タタキ	内外：にぶい褐 断：橙・褐灰	1～3mmの長石・ 赤色酸化粒等含 む	反転復元 弥生時代後期
57	図 13 図版 8	弥生土器 高坏	2 I10d10	包含層	-	4.7+	-	脚部 50%	全体的に摩滅 円穴4方向 か?	内外断：橙	密 1mmまでの 白色砂粒等含む	反転復元 弥生時代後期
58	図 13 図版 8	弥生土器 高坏	2 I10c5	包含層	-	4.2+	-	脚柱部 80%	脚柱部中空 全体的に摩滅 内面シボリ	内外断：橙	密 1～2mm 大 の石英粒等含む	反転復元 弥生時代後期
59	図 13	須恵器 杯蓋	1 I10de15	包含層 等	(16.7)	1.7+	-	10%	内外面回転ナデ	内外断：黄灰	密 白色砂粒少 量含む	反転復元 8世紀後半
60	図 13 図版 8	須恵器 蓋	1 I10g18	中世包 含層	(20.8)	2.6+	-	40%	外面回転ナデ、回転ヘラケズ リ 内面回転ナデ、ナデ	内断：灰 外： 灰～灰白	密 1mmまでの 白色砂粒含む	反転復元 8世紀前半
61	図 13	須恵器 杯蓋	1 I10e16	84	(14.7)	1.45+	-	5%以下	内外面回転ナデ	内外：灰 断： 灰白	密	反転復元 7世紀末 混入遺物
62	図 13 図版 8	須恵器 坏身	1 I10e15	平面精 査	(14.6)	4.2	(9.0)	20%	内外面回転ナデ やや軟質	内外：灰白 断： 灰白～にぶい黄 橙	密 細かい白色 砂粒、1mm位の 赤色酸化粒を少 量含む	反転復元 8世紀
63	図 13 図版 8	須恵器 壺	2 I10 b 9	包含層	-	4.5+	(13.6)	高台部 15%	外面回転ナデ 内面ナデ 外 面自然袖付着	内：褐灰 外： 黒～浅黄(袖)・ 灰 断：にぶい 褐	密 1mmまでの 白色砂粒を少量 含む	反転復元 8世紀
64	図 13 図版 8	黒色土器 椀(鉢)	2 I10 b 9	包含層	-	2.2+	(6.5)	高台部 25%	外面ヘラ状工具ナデ、ヨコナ デ 内面ヘラミガキ?	内：黒 外：黒 ～暗灰・褐灰 断：黒褐	密 白色砂粒を 微量含む	反転復元 9～10世紀
65	図 13 図版 8	瓦器 皿	1 I10f15	トレン チ断面	8.7～ 9.0	2.1	-	70%	内面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ	内外：灰 断： 黄灰	密 白色微砂粒 含む	焼歪あり 13世紀前後
66	図 13 図版 8	瓦器 皿	1 I10d16	平面精 査	8.5～ 9.2	2.1	-	100%	外面ヨコナデ、ユビオサエ・ ナデ 内面ヨコナデ、ナデ 見込み部ジグザグ状のヘラミ ガキ	内外：灰・灰白	密	遺構の遺物か 13世紀前後
67	図 13 図版 8	土師器 小皿	1 I10h15	包含層 等	(9.4)	1.8	(7.5)	40%	内外面回転ナデ・ナデ 外底 部回転糸切	内外：浅黄橙 断：にぶい橙	φ～1mmの赤色 酸化粒微量含む	反転復元 13世紀前後
68	図 13 図版 8	山茶碗 碗	1 I10d16	包含層 等	-	2.2+	7.4	高台部 25%	内面回転ナデ・ナデ 外面回 転ナデ 外底部回転糸切・薬 圧痕あり	内外断：灰白～ 黄灰 断：灰	密 細かい白色 砂粒少量含む	反転復元 13世紀前後
69	図 13 図版 8	瓦質土器 甕	2 I10a7・8	機械掘 削	(32.0)	5.7+	-	5%以下	外面回転ナデ、平行タタキ 内面回転ナデ、ユビオサエ・ ナデ	内外断：黄灰	密 1mmまでの 白色砂粒を含む	反転復元 14世紀
70	図 13 図版 8	備前焼 壺	2 I10b10	東側側 溝 地山直 上	(11.2)	5.1+	-	口縁部 25%	内外面回転ナデ 外面体部は 降灰により調整不明	外：灰白ほか (袖)・黒褐 内： 灰・暗灰(袖) 断：灰	密 白色砂粒を 多く含む	反転復元 14～15世紀
71	図 13 図版 8	瀬戸美濃 系 白天目碗	2 I10b・c4		(10.8)	5.7+	-	15%	外底部付近露胎	釉：灰白 断： 淡黄	密 ややざつと りしている	反転復元 17世紀
72	図 13 図版 8	瀬戸美濃 系 天目茶碗	1 I10h15	包含層 他	(10.7)	7.4+	-	20%	鉄釉 外底部露胎・回転ヘラ ケズリ	釉：黒褐 断： 露胎：にぶい黄 橙	やや粗 1mm程 度の石英微量含 む	反転復元 17～18世紀
73	図 13	備前焼 鉢	1 I10g15	表土下	(18.5)	12.1	(13.4)	20%	内外面回転ナデ ロクロ目顕 著 外面塗土	内：暗赤褐～灰 赤 外：褐灰～ 暗赤褐 断： 暗赤褐	密 1～2mm の 長石粒等少量含 む	反転復元
74	図 13 図版 8	堺・明石 播鉢	2 I10d9	機械掘 削	(29.6)	11.3	(16.0)	30%	外面回転ナデ、回転ヘラケズ リ 外底部未調整 内面回転 ナデ 播目密 8本/2.4cm	内：暗赤褐 外： にぶい赤褐 断：赤褐	1～3mmの長石 粒等多く含む	反転復元 18世紀



調査区全景（上空から）



1.1区全景（南から）



2.2区全景（南から）

1. 1区 下層確認
トレンチ断面
(西から)

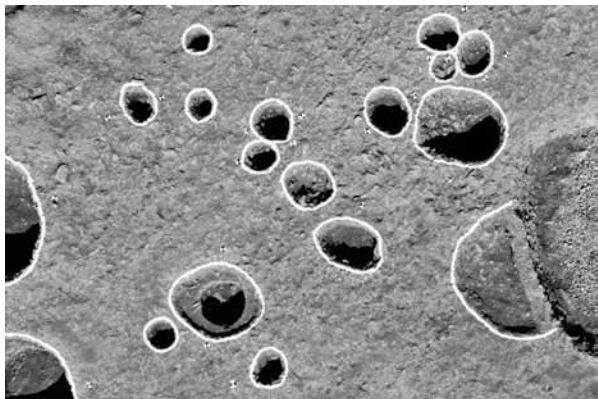


2. 1区 東壁断面
(北西から)

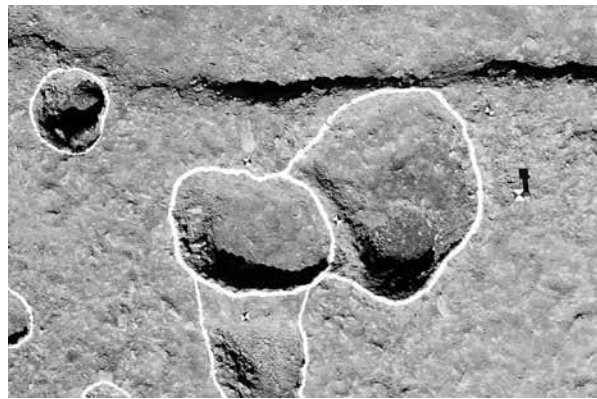


3. 2区 東壁断面
(西から)

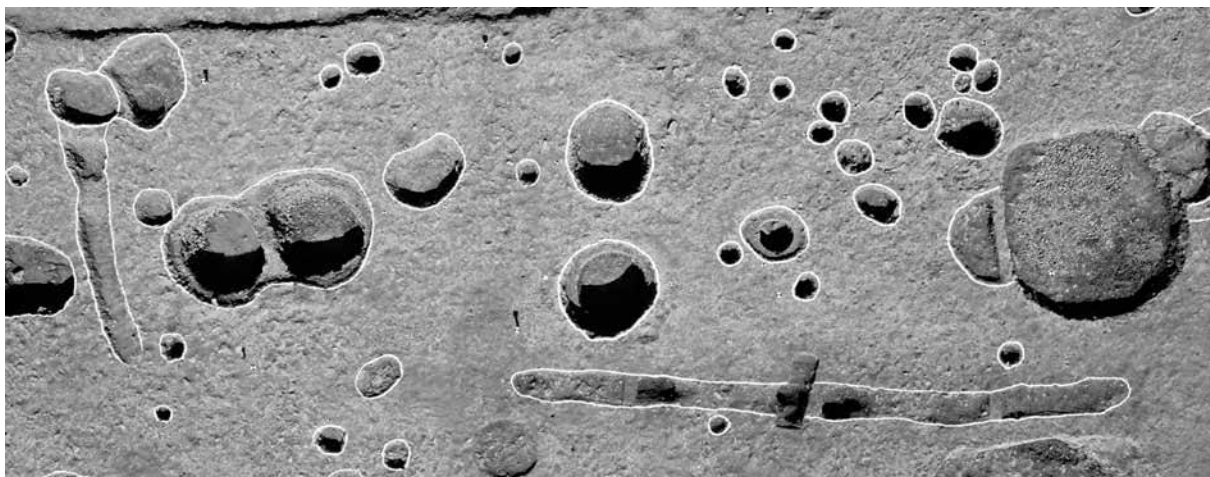




1. 1区 古代・中世の遺構群（上空から）



2. 1区 遺構 35・58（上空から）



3. 1区 遺構 59・84 周辺（上空から）



4. 1区 遺構 41 断面（東から）



5. 1区 遺構 35 断面（西から）



6. 1区 遺構 45 断面（東から）



7. 1区 遺構 49 断面（西から）



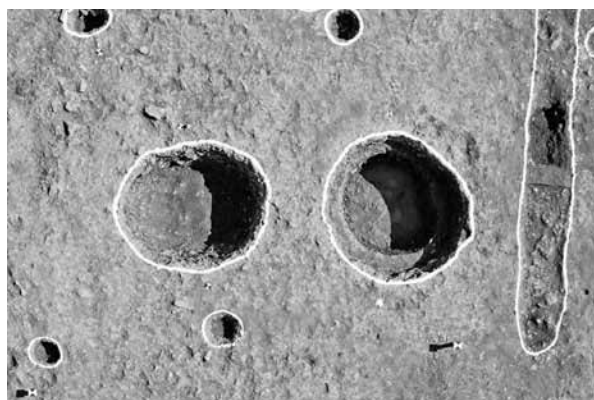
1. 1区 遺構3断面 (東から)



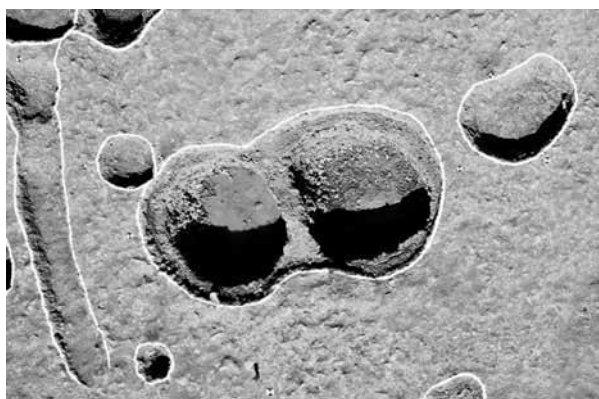
2. 1区 遺構4・5 (東から)



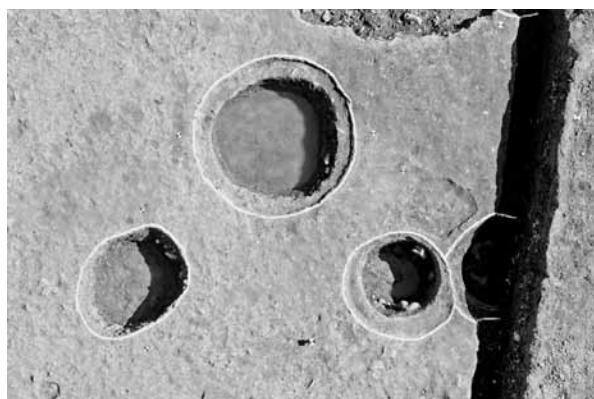
3. 1区 遺構4断面 (東から)



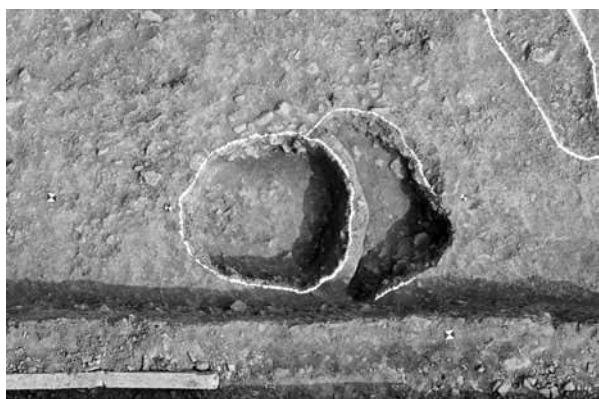
4. 1区 遺構22・23 (上空から)



5. 1区 遺構24・25 (上空から)



6. 1区 遺構27・28・31・33 (上空から)

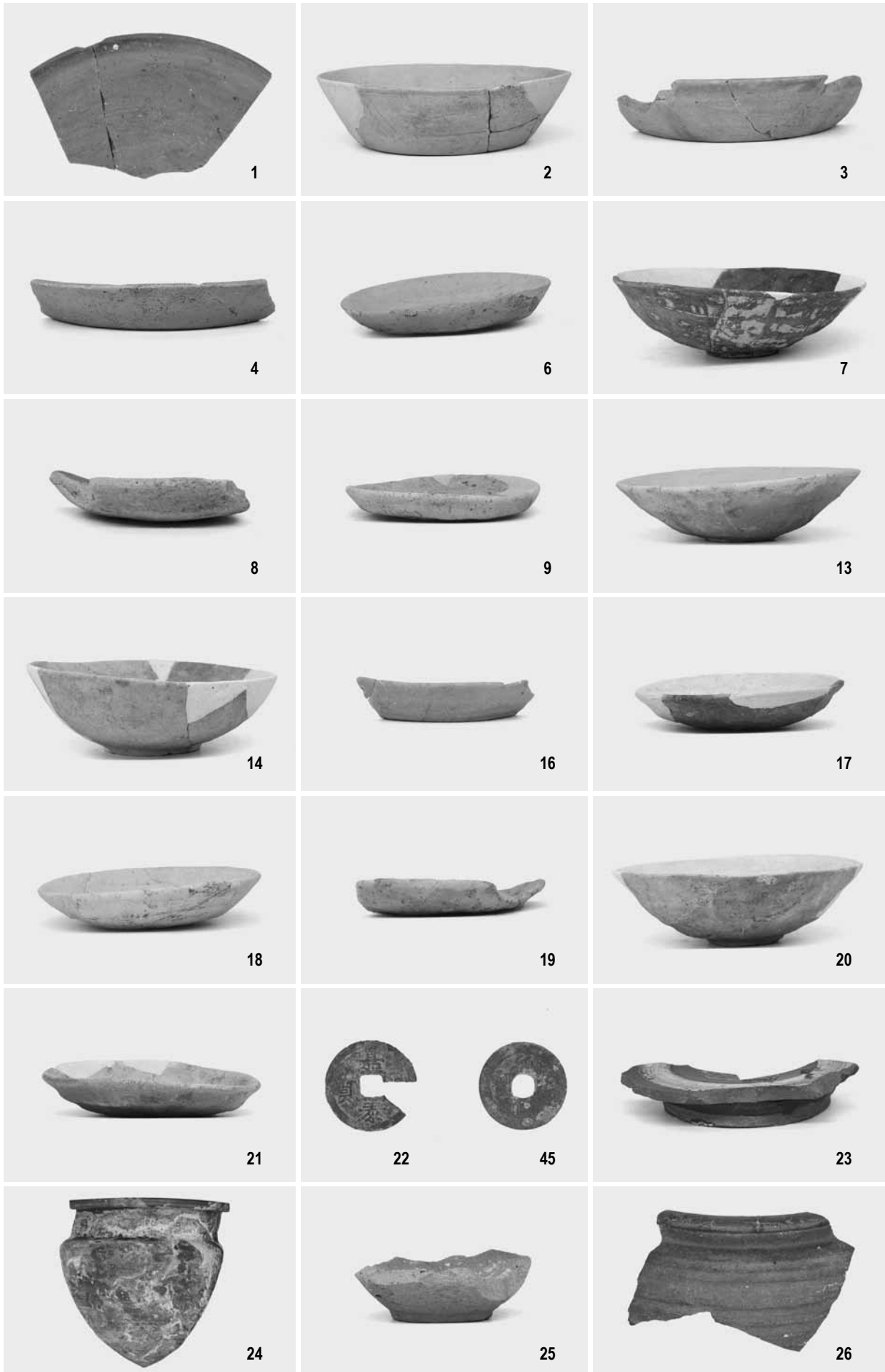


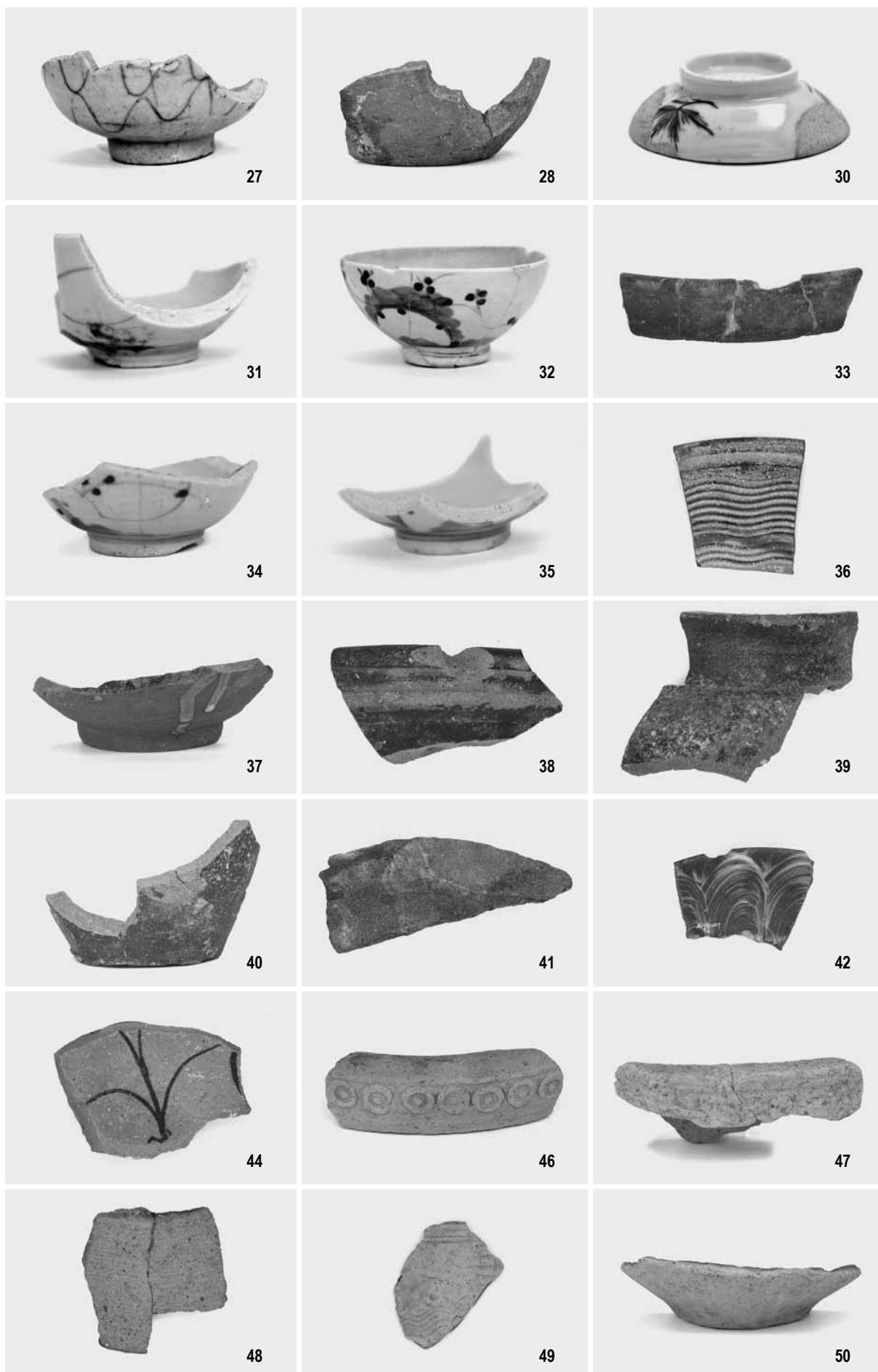
7. 2区 遺構91・92 (上空から)



8. 2区 遺構132・133断面 (上空から)

図版6 出土遺物(1)







報告書抄録

ふりがな書名	しんどういせき 新堂遺跡							
副書名	一般国道42号有田海南道路建設事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	川崎 雅史							
発行機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8301 和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1 TEL 073-472-3710							
発行年月日	西暦 2023年 3月 10日							
ふりがな所収遺跡	ふりがな所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどういせき 新堂遺跡	わかやまけん 和歌山県 ありだし 有田市 しんどう 新堂	30204	007	34° 05' 11"	135° 08' 06"	2022.1.11 ～ 2022.3.31	966.3 m ²	道路建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新堂遺跡	散布地	弥生時代	なし		弥生土器・サヌカイト			
		奈良	土坑		須恵器・土師器		容器埋納土坑	
		鎌倉時代	土坑・溝状遺構・小穴・柱穴		瓦器・土師器・瓦質土器・青磁・白磁・国産陶器		集落跡	
		江戸時代	埋桶・溜樹・土坑		近世陶磁器・瓦・茶臼		埋桶・溜樹群	
要約	<p>新堂遺跡周辺では弥生時代中期以降、人々が生活していたことが明らかになった。弥生時代の遺構は検出できなかったものの、直近に集落が存在したことが窺え、近くの山頂近くで出土している大峯銅鐸（新堂銅鐸）との関係が注目される。</p> <p>古墳時代の遺構も検出できていないが、遺物が出土していることから、遺跡周辺で集落が存在した可能性が考えられる。</p> <p>古代の遺構は土坑1基のみであるが、遺物は一定量出土している。有田川流域の当該期の遺跡は、山裾や谷あい位置することから、有田川下流域で平野部が安定するのは、城館などが築かれるようになる中世後半以降であると考えられる。</p> <p>中世でも鎌倉時代の遺構・遺物は最も多く、調査区域外にも展開が予想できることから、周辺に広く集落が展開していたことが想像できる。当期の供膳具である瓦器と土師器では、瓦器が占める割合が高いことが窺える。</p>							

新堂遺跡

— 一般国道 42 号有田海南道路建設事業に伴う発掘調査報告書 —

2023 年 3 月 10 日

編集・発行：公益財団法人 和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本：株式会社 協和

和歌山県海南市南赤坂 5-3